
有恋歌

三木こう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

有恋歌

【Nコード】

N2935T

【作者名】

三木こう

【あらすじ】

自称超常現象研究者、年上美人の恋歌^{れんか}さん。そんな彼女に振り回され気味の童顔^{ゆっぴり}少年有理君。吸血鬼と異能力、二人は自身の異常を治療する術を探すため、オカルト現象に挑み続ける。今日も彼らの行き先は超能力、心霊現象、なんでもござれ。そんな二人の非日常。一話（歌）完結の連作短編形式です。

プロローグ

首筋が疼いた。

大学からの帰り道、何も考えず、ただただ無心で歩く。

ふと顔をあげると、前方に一人の女性が待ち構えていた。

いや、正確には待ち構えていたかなんて知りようもないけれど、直感的にそんな感想を抱いてしまった。

雑居ビルに囲まれたどこにでもある街道での出来事。なのに、どこか現実離れたようにふわふわと身体が浮いていきそうになる。

「……ねえ、君」

長く、綺麗に伸びた黒髪。その中からのぞく整った顔立ちが妖艶な空気を纏ってこちらを射ぬく。

それだけで僕は動けなくなっていた。首筋が汗ばみ、敏感になった感覚がジンジンと自己主張を始める。

「……ねえ、ねえ君」

本来なら高く澄んだ綺麗な声も、今となっては僕の耳を浸食する捕食者の囁きでしかなかった。なんとか動かせるのは指先だけで、懸命にぐーとぱーを繰り返す。

「……ちょうだい、ほしいの」

女性は近づき、成熟した大人の色香を放ちながら、僕の頬に手を当てた。

それだけで僕はビクつき痙攣して、彼女の瞳から視線を逸らせない。こんな世界は知りたくない、きつと彼女は僕が歩んできた19年の人生とは似ても似つかない世界の住人だ。

「……いた、だきます」

最初にしたのは痛み。

そしてじわりと広がる甘い香り。

血と、女と、異世界感とでも言えばいいのか、どうしようもない

違和感が僕の中へと広がり続ける。

彼女は、僕の首筋に顔を埋めたまま妖艶に笑っているようだった。見なくてもわかる。

それぐらい今の僕は敏感で、過敏で、感覚的になっていた。

やがて彼女は満足し、首筋に宛てがっていた柔らかな唇を離すと、顔をあげ至近距離でこちらを見つめてくる。

それだけで、理由はいらない。

おそらく僕はすでに、この時点で、彼女に捕らえられていた。

まあ、簡単に……至極極端で俗物的で、なんの余韻もなく、一般的な解釈をするならば、きっと僕はこの時彼女に、恋をしたのだった。

一歌(1)

超常現象なんてクソ喰らえというのが彼女の口癖だった。

始まりはいつも突然に、例えば一本の電話からだったりする。

よくいえばアンティーク、悪くいえば時代遅れの産物である黒い回転ダイヤル式の電話機がけたましく音をならした。

時刻は夕時、いつものように縁側でのんびりとくつろいでいた僕は、小さくため息を吐き出しながら、受話器に向かって放たれる言葉の数々に聞き耳をたてる。

「いつ? ああそうなんだ。それで? ほんとに? わかった、了解。それじゃあ」

よく通る澄んだ声はこの古びた日本家屋では筒抜けのようなものだった。

会話の内容はいつものような業務連絡で、特に変わった言葉は出てきていない。どうやら、我社……超常現象研究所としては珍しく、比較的まともな仕事にありつけるらしい。

もっとも、事務所の玄関の脇で忘れさられている看板に記載された長つたらしい名称なんて、僕たちもお客さんも誰も使ってはいないけど。

縁側から日本庭園を眺めながらゆっくりと緑茶をすする。

なんとも風流で心が落ち着いた。

けれど、そんな安息の日々は長くは続かないことを、僕は経験から察知している。いふなれば今のは最後ののほほんタイムといったところだろう。

「有理君、出番よ、私たちのね」

「恋歌さん。いつもながら説明が適当ですね」

恋歌さん。僕のバイト先の上司、あるいは先輩にあたる人だ。

恋を歌うなんて乙女チックな名前をしてはいるが、それが本名か

どうかは怪しいものだ。一軒の日本家屋を貸し切って、事務所兼自宅としているのがこの平屋で、僕は大学の近くにアパートがあるというのに、ここに入り浸るのが習慣化していた。

まあ助手として、少なくともバイト代をもらってはいるのだけど。「説明なんて後からついてくるのだから問題ないわね。さつさと車に乗り込む、現場は待つてはくれないのだからね」

「日が沈みましたね……」

僕の最後の呟きが、暗がりには溶け込んでいく。時間も18時を回ったぐらい。春にしては随分今日は暗くなるのが早い気がした。

長い黒髪の女性がすりとらびた手足をばたつかせ、一階建ての平屋を走り回る。

あわただしく身支度を整える恋歌さんを横目で見ながら、僕も足に力を入れ立ち上がった。けれど、男の身支度なんて簡単なもので上着を羽織り、携帯や財布を入れるための小さなシヨルダーバックを肩にかけるだけで準備は完了してしまった。

最後に洗面台の鏡を覗き込むと、猫毛な髪と無表情な童顔が映りこんでいた。

「先に出て車のエンジンかけておきますね」

いつものことなので気にはしないが、恋歌さんは自室に閉じこもったまま出てくる気配はない。

女性の身支度は色々と大変なのだろう。……僕も知識でしか知らないけれど。

ガラガラと音をたてながら玄関を出て、日本庭園に侵入気味の駐車場まで足を運ぶ。これまた使い込まれた藍色の軽自動車にキーを差し込み、エンジンをかけた。

「まあ、僕の免許はAT限定だから運転はできないけどさ」

誰もいないのに呟いてみたりした。

我ながらカッコがつかないっただらありやしない。これは夏休み辺りにMT車への免許切り替えを考えるべきだろうか。

「お待たせ。どう、綺麗でしょ？ 当たり前すぎて訊くまでもない

「ほどこ」

「そうですね。恋歌さんはいつも通りお綺麗ですよ」

「なんか有理君……。そっけなくない？ お姉さん、傷つくよ」

「僕がそっけないのは昔っからですよ。嘘はつきませんけどね」

恋歌さんにとっての仕事着というよりユニフォームなのかもしれない、白のワイシャツと黒のスカート、そしてストッキングと伊達メガネ。

一見してできるOL風なチョイスだが、袖先や各所に存在するヒラヒラやふわふわがただの趣味だということを主張していた。

ちなみに伊達メガネを要所要所で取り出すのが、最近の恋歌さんのお気に入りらしい。

年上の綺麗なお姉さんたる恋歌さんの、着るもの付けるものが一々似合いすぎていて、僕は毎回心の中で、色んなフェチズムを開拓させている。最近は、少しばかりメガネ萌えに目覚めそうになっていた。

「見とれてる？」

「見とれてますよ。いつも」

「有理君。そういう台詞はもう少し恥じらいながら言ってくれないかな？ せつかくの年下属性が台無しだと思わない？」

恋歌さんがぼやきながら、右座席に乗り込む。

そして車のギアを華麗な手さばきで操り緊急発進。

「さて行きましようか」

「僕はどこに、なにをしに行くのかすらわからないんですけどね」
ドライブに出かけるのも悪くない。

もっとも、僕にとって恋歌さんのドライブは毎回行き先不明で始まるのだった。

一歌（1）（後書き）

そんなわけで、始まりました、有恋歌。

簡単に説明しますと、有理君と恋歌さんがくつちやべりながらオカルト現象に挑んでいくようなお話です。たまに戦ったり、推理のよ
うなことをしたり、恋愛っぽいことをしたり……。

各話は短編程度の長さで完結し、連作形式として繋がって行きます。
話数が進むごとに伏線？ っぽいものも回収していけたらなと思っ
ています。

一話、一話はそれほど長くはなく、サクッと読めるかと思いきいの
で、よろしければお目通しくださいます。

一歌(2)

「すっごいわね。あるところにはあるもんだわ。こんなお屋敷ってさ」

「なんだか恋歌さんと来る場所はなんちゃらサスペンス劇場の舞台みたいな所が多い気がします」

軽自動車のくせにやたら速い車で20分ほど走った先、僕たちが訪れたのはバカでかいお屋敷だった。

洋風のたたずまいのまま、横にも縦にも長いお屋敷がただっぴろい庭園の中にぽつりと存在している。恋歌さんの家も風流な日本家屋でそこそ良いお金がかかってるはずだが、この場所はきつとそれ以上だろう。

お金の使い方が真逆というか、ココは派手な方向に走ってしまったようだけれど、僕としては少し寂れたぐらいの日本的な屋敷の方がワビサビがあつてよいと思う。

「いらっしやいませ。お待ちしておりました。わたくし井上と申します」

バカでかい洋館に圧倒されていると駐車場までお手伝いさんが出迎えにやってきていた。名前を尋ねられることもなく本人確認が完了したのか、執事服に身を包んだ初老の男性が頭をさげ玄関までの案内を開始する。

「有理君。すっごいわね、執事よ、執事」

「つついせいバスチャンと呼びたくなりますね」

「真顔でボケるのは止めてくれない？ とてもシユールだわ」

僕としてはくすりと笑えるナイスジョークを繰り出したつもりだったが、どうやら無表情すぎたらしい。

「私もメイドさんでも雇おうかしら。好条件だせばひっかかりそうなものだけ」

「僕なら応募しませんね。もしくは一週間で辞める自信があります」

「いえ、ひっかかるわね。有理君はいつまでも私と一緒にいたいみたいだから」

「それはそうですね。僕はモノ好きなので、メイド服を着せられな
いかぎりは付き合いますよ」

さりげなくメイド服に対する予防線をはっておいた。

例えばこの屋敷でメイドやら執事に感動した恋歌さんが家に帰っ
てから僕にそれを求めるなんていうのは、ありがちな展開だった。

「それではどうぞ、お待ちしておりました。恋歌様に、有理様」

「どうもありがとうございます」

「すみません、おじゃまします」

玄関から館の中に足を踏み入れる。

ベタな螺旋階段なんかが存在していた。そして、床に敷き詰めら
れたジュータンは一目で高級なものだと判別できる。

ところで、僕たちのことは名前でしか呼ばれなかったが……なる
ほど、この業界ではそんな感じで通じてしまう所までできてしまっ
たらしい。

「すっごいわね。こういう派手なのって一度は体験してみたいって
いうのが乙女心ってところかしら、お姫様みたいなベットとかさ」

本名かまではわからないが、恋を歌うなんて乙女チックな名前を
した成人女性がうつとりとした風に呟いていた。

「なに？ 私みたいなおばさんがこんなこといってちゃダメかしら
？」

「いえいえ、恋歌さんはまだまだお若いですよ」

恋歌さんはタチの悪いことに地獄耳かつ読心術の達人だったりす
る。ポーカーフェイスな僕の心が読めるのだからきつとそういうこ
となんだろう。

「この部屋にて旦那様がお待ちです」

廊下をしばらく進み、大きな部屋の前につくと、執事さんが優雅
に扉を引いた。

ゆっくりと室内に足を踏み入れると、優しそうな顔をした中年男

性がこちらを向いた。

「これはこれはようこそいらっしやいました。わたくし、この屋敷の主人の宮城家永と申します」

「こちらこそおじゃまさせていただきます」

宮城さんと恋歌さんが大人の対応で挨拶を交わす横で、僕も子供ながらに頭を下げながらちらりと室内を眺め回した。

思ったよりも家具やデザインはシンプルで、綺羅びやかに装飾された屋敷の中にしては少々地味なぐらいの装飾だった。

「はっは、少々地味ですか。他の部屋と違いここは私の趣味よきな装飾なもので」

「いえ、そんな……。僕もこういう部屋の方が落ち着きます」

つつい室内の装飾にたいする感想が顔に出てしまったのか、宮城さんにフォローされてしまった。

成金というイメージを持っていたがどうやらこの館の主人さんは中々に常識的な感性をお持ちのようだ。

「すいませんうちの子が……。って、別に実の子供とかそういうことではないんですよ。断じて、ただの助手みたいなものですから」

妙におばさん臭い反応に自分自身ショックだったのか、恋歌さんは自分で自分をフォローしていた。

大人にも色々な人間がいるのだった。

「思っていたよりも普通の人で安心しました。これなら家の娘をおまかせできます」

宮城さんは優しげに微笑ながらも、どこか影のある表情で椅子から立ち上がった。

「それではご案内します。娘のところまで……」

一歌(3)

「すでにおわかりのことと思いますが、私達はあくまで研究者というか物好きというかヘタの横好きみたいなもので、あまり期待はなさらないでくださいね」

「いえいえ、お二人の噂は聞き及んでいますよ。別にプレッシャーをかけるわけではないんですが、今の私には頼る相手がいるだけで貴重なのです」

その言葉にはどんな意味があったのだろうか。

大概僕たちが訪れる場所は手遅れになりかけの状況が多い。今回にいたつてもそうだったのか、宮城さんは疲れた表情ながらも、胡散臭い僕たちみたいいな連中に期待をよせてくれているようだった。

「ずいぶんひどいみたいね、娘さん」

宮城さんの後をついて歩きながら、恋歌さんは僕の耳元に近づくと小さな声で話かけてきた。

整った顔がすぐそこで、女性特有の柔らかくて良い匂いがして、ついつい胸がドキドキと高なってしまう。

「そうですね。恋歌さんを信じてるとかよっぽどですよ」

「有理君は厳しいわね。褒め言葉だと受け取っておくわ」

恋歌さんの表情が微妙に強ばっていた。

僕たちがイチャイチャと話しているうちに、目的の部屋についたようで、可愛らしい装飾で彩られた扉の前で宮城さんが振り返った。

「こちらが娘の部屋です。嫌われてしまったのか私は一緒に入れませんが、どうか娘の力になってやってください」

宮城さんが丁寧に頭を下げる。

世間一般でいうところの良い大人がこれほどまでしてくれらるといふのは、まだまだガキと呼ばれる僕みたいな人間から思うところがあった。

なんだか嬉しくもあるし、仕事にたいするモチベーションや責任

感もあがるというものだ。

「わかりました。力になる、というのも大げさですが私達にできることがあれば、精一杯させていただきます」

宮城さんが娘さんの部屋から離れていくのを見守りながら頭を下げる。恋歌さんもやる気になってるのがさっきの台詞からも伝わってきた。

「……力になるっていうのは言い過ぎよね。結局私達も自分のために来てるわけだし」

うん、きつと責任感やプレッシャーに押しつぶされそうなんだ、さすがのこの人もさ。と、思おうとしたけれどよくよく考えてみると恋歌さんのそんな姿は想像できなかった。

「それじゃあさっさと行きましようか」

「ちよつと待つてください。深呼吸するんで」

「真顔で緊張してるのかね。ま、年頃の女子の部屋だもの、精々楽しみなさい」

何を楽しめというのだろうか。

おっさんみたいなポケをスルーしながら、恋歌さんの後ろについて部屋に足を踏み入れる。

一見して女の子の部屋だというのが見て取れる。ピンクっぽい壁紙に、ジュータン、そして部屋の中央に位置するのは漫画みたいなお姫様ベットだった。

ベットの上から垂れているレースみたいな薄いカーテンの裏側に人のシルエットが見えた。

「こんばんわ。娘さん……っっていうのはおかしいね。宮城さん、いいですかね？ 良ければ名前の方も教えてくれるかな？ って、他人に名乗る前に自分からってことで私は恋歌ですよろしく」

「あ、僕は有理です。よろしくです」
すらすらと長つたらしい自己紹介をこなす恋歌さんに続き、僕もどもり気味の声をあげる。

えらい違いだったが、まだまだガキな僕としては所詮はこの程度

なんだろう。

「……あの、霞美です」

霞美さんはベットのカーテンに隠れたまま声をあげる。小さな、か細い感じの声だった。

「じゃあ霞美さん。カーテン開けてもいいかな？」

「はい」

カーテンの裏側でシルエットがゆっくりと戸惑いながらも頷いた様子が見えた。

「え？ あ、……はい？」

しかし霞美さんの素顔を覗く前に室内に異常が発生していた。慌てて変な声が出てきてしまう。

家具を伝って異常な振動が感じ取れた。地震かと思って隣の恋歌さんを見ると直立不動のままじっと霞美さんの方を見つめているだけだった。

その姿から、ああこれは地震じゃないんだなと理解しながら、周りに意識を張り巡らせる。

「これって、なんていうか、ベッタベタにポルターガイストとかいうやつですかね」

「だったら面白いとか思ってたけど状況的にそうみたいね。建物は揺れていないもの」

真剣な表情で恋歌さんが瞳を細める。

室内にあった家具　タンスや衣装ケースやらが浮いている。まだユラユラと宙に浮いているだけで、動きに指向性までは発生していないようだ。

「霞美さん。これってあなたの力なの？」

「え、あの……私は、私は別に……」

怯えた震えた声が聞こえる。霞美さんがベットの中で布団を抱きしめるような姿が見えた。

「逃げまじょうか有理君。今はただ浮いているだけだけど、よくよく見ると部屋のアチラコチラに重たいものが叩きつけられた痛々し

以後がついてるわよ」

「なんだかきちんと見ると面白いですね、これ。物理学とか完璧無視ですよ、これ」

モノが何の理由もなく浮くというのは中々に面白かった。

僕が学校でならった知識なんていうのはまったく効果もなく、超常的な外的要因が働いているわけだ。超能力とかハンドパワーとか、そういう世界だった。読み切り漫画の主人公なら使えても不思議はないんだろうけれど。

「有理君、バカいってないでさっさと動く。それじゃあ霞美さん、また後でうかがいますね」

恋歌さんは満面の笑顔を霞さんに向けながらドアを閉めた。

部屋から出た後でドスンと重たいものが叩きつけられる音がした。どうやらポルターガイストは終了し、宙に浮いた家具が落ちたようだ。

「すごいっすね。僕、驚きました」

広々とした廊下でシミジミと呟いてみたりする。

「有理君、そういうのはもっと驚いた顔でいうものよ」

恋歌さんはあきれたようにため息を吐いていた。そういうあなたは家具が宙に浮く不思議空間でいつも通りの仁王立ちだったじゃないですか、という言葉は一応飲み込んでおいた。

この程度で心を乱してしまう僕が純粹なだけなんだろう。

「さって、これはこれは案の定というか話に聞いた通り、私達の領分な不思議で幻想的な事件になってきたわね」

恋歌さんは言葉のもつ胡散臭さとは裏腹に、楽しそうに笑いながら腰に手をあて指をパチリとならした。

「……なんででしょうか恋歌様」

執事さんが現れた。

「かぁー、ありがとうね執事さん。こっそり打ち合わせしておいてよかったわ。見て、この有理君の驚き顔。珍しいのよこの表情」

驚きますよそりゃあ、でもちよっぴり呆れてもいます。

「恋歌さんのそういうところ、可愛らしいとは思いますが」
「さて、執事さん。少しばかりゆっくりできる部屋を貸していただ
けるかしら。ついでに事情聴取というか、情報提供もお願いできま
すかね」

僕の愛の言葉は軽く流され、恋歌さんがイキイキとし始めた。な
んだかんだで、彼女は趣味でこういうことをしているのかもしれないな
いと思いつつ、僕は小さく嘆息するのだった。

一歌(4)

「というかよくよく考えたら僕たちいきなりあんな危ない部屋に入りましたけど、一言いつてくれてもよかったですよね?」

「私は知っていたからね、有理君も知ってると思っただんでしょね」
思い出したように尋ねてみると、恋歌さんは当たり前でしょ、という顔で返事をしてくれた。

それって騙されたってことじゃないですか、という言葉は飲み込んでおく。考えてみれば僕が情報弱者な状況は常日頃からあふれかえってるパターンでしかなかった。

「しっかしさすがドでかいお屋敷ね、紅茶とお菓子が美味しすぎるわ」

「そうですね。僕は日本茶の方が好きですけど」

客間として僕たちが通された一室には小さな机とチェアにダンスとベツト、というシンプルな感じで家具が置かれていた。そのチェアに腰掛け慣れない光景にそわそわしながらも上品に紅茶をすすったりする夜の一幕。

簡単な夕食をいただいた後のティータイムだった。ちなみに、食事を簡素なものにしてもらったのは正直早く帰りがかったのと、呑気に腹を満たしているほど暇じゃなくなったからだ。

時間が時間なのか、屋敷内もどこか静かで家事をまかされているお手伝いさんたちもその大半が仕事先から開放され、家路についたようだ。残っているのは身内のようなかなり近い世話を任せている人だけらしい。

「さて、恋歌さんそれでわかったんですか?」

「なにがよ。あんな超常現象に理由なんてあるわけ?」

「ニヤニヤした顔で質問を投げ返されてしまった。」

「僕は信じてるんですよ。この世の現象にはすべて理由があるって恋歌さんの言葉を」

つつい真面目な顔になってしまった。

「わかったわかった、ゆつくりと説明してあげるわよ。その変わりにきつちりと治療に協力すること」

なにか良からぬ雰囲気を感じ取れたけれど、仕方なく僕は頷いた。恋歌さんと一緒に、屋敷に出入しているお手伝いさんの話を数人分聞いたが僕では真相に辿りつけなかった。霞美さんのポルターガイスト現象に原因があるのなら知りたいというのが、人間の好奇心というものだと思う。

「じゃあ霞美さんの部屋につくまでにちょっとだけ話しておこうかしら。ってこういう探偵っぽい振る舞いは好きじゃないわ。私は決してそんなものではないし、そんなものとは似ても似つかない存在のはずなんだから」

客間を出て恋歌さんに連れられるままに霞美さんの部屋へと向かう。広大で似たような間取りの続く屋敷内をすいすいと移動する恋歌さんはさすがだった。

「じゃ、さっそく質問ね。有理君、霞美さんがどうして家具なんて持ち出して私たちを威嚇してきたと思う？ ややこしいから彼女が超能力的な力を手にしているという仮定での話でいいわよ」

「なんでですかね。やっぱり人に怯えているとか、トラウマがあるとか」

「うーん普通すぎる解答ね。それが正解だとすると、なぜ彼女は私たちが部屋に入ってきてベットの近くによって話かけるまで何もしてこなかったのかしら」

たしかにそういう部分で僕の解答は破綻している。

対人恐怖症とかの結果、あんな力をふるってきたのなら僕たちが彼女の部屋に普通に案内されたのもおかしい話だし、無理やりに入っていたとして無事に帰ってこれた意味がわからない。

「ヒントあげる。乙女にとってはとても重要なことよ」

「きつとそれ、重要なヒントっぽいんですけど。僕は乙女じゃないので理解できない気がします」

ついつい意地悪三昧の恋歌さんにとげとげしい口調で返してしま
った。

理解している人と、理解していない人という図式だところやって
僕は集中攻撃にあっってしまうのだった。気持ちがほんの少しばかり
ささぐれても仕方ないというものだ。

「ま、今からいやでもわかることだと思っただけだね」

話している間に霞美さんの部屋の前についたらしく、見覚えのある
扉の前で恋歌さんが足を止めた。

「有理君。耳貸して」

「いやな気配がしますけど了解しました」

耳元でそつとささやかれる。

ところでなぜこんな場所で内緒話をしているんだろう、誰かに聞
かれる可能性でもあるというのだろうか。

「まじで、ですか……」

「そ、しっかり治療してあげなさい」

作戦を伝授された僕は、満面の笑みを浮かべる恋歌さんに見守ら
れながら扉をノックした。

一歌(5)

「あの、すいません。夕方遅くに訪ねた有理ですけれど、よかったもう一度会ってくださいませんか？」

返事はない。

というよりも扉が開くまでは音で判断するしかないんだけど、僕の感覚では室内は静かなものだった。寝ているのか無視を決め込まれてしまったようだ。

たしかにあんな物騒な現象を巻き起こしてしまうかもしれないなら、結果的に人に会いたくなくなるのもわかる。

「というわけで私の特技が役立つわけね。まったく鍵を開けるにもそれなりの苦労があるってのに……、お屋敷自体のセキュリティが完璧に近いからこういう個室単体には手を抜き気味なのが助かるわ私みたいな素人にはアンティークな取っ手しか開けられそうにないからね」

恋歌さんは泥棒みたいな道具を取り出し、僕にはよく分からない動作で鍵穴をこねくり回していた。

怪訝な視線で恋歌さんを見る。

「ほら、一時期流行らなかつた？ サブプライムターンとか」

「それをいうならサブターン回しだと思います」

僕の視線に気づいたのか、恋歌さんから話題をふってきた。ついつい冷ややかな態度でそれに返事をする。僕の記憶が確かなら恋歌さんのしている行為はサブターン回し的な方法ではないと思う。

今さら驚くほどでもないんだろうけど、まったくこういう特技はどうかと思うんだ、常識的な人間として。

「さて開いた。この力チリって音が達成感をそそるわね」

「……恋歌さん。まあいいですけど、では行きます」

表情を引きつらせながら、不法な手段で扉を開ける。

できるだけ音をたてずに侵入すると、室内は電気はついたまま、

夕方に訪れた時のように霞さんはベットのカーテンの内側に腰掛け
ているようだ。

「だ、誰！ どうして……」

さすがに驚いているのか、大きめな声が漏れ聞こえてくる。

うん、イメージが掴めそうだ。

「綺麗な声ですね。できればもつと聞かせてほしいものです」

自分でもすんなりといえたことにちよっぴり驚いた。普段から冷
静を心がけていたのがこんな所で役に立ったのかもしれない。

「……っえ？」

露骨に警戒が緩んだのがわかる。

それでも僕が彼女のベットに近づくと異変の気配が迫ってく
るのがわかった。室内を注意深く見てみると家具がほんの少し揺れ
始めている。

「すみません突然！ どうしても一目見たかったもので……、失礼、
しますよ」

ゆっくりと緊張しながらカーテンをめくる。

「いや、いや　！」

とたんに部屋の中の家具が一斉に踊りだす。夕方とは違う、より
不規則な動きで慌てたように宙を行き来し始める。すごいもんだ、
いるところにはいるというか出来る人には出来るというか。

ふと、この手の能力に憧れを覚えてしまう。

週刊漫画雑誌的にはあの手の力を使いこなしてみたいという願望
もある。

今はそんな心の変化は押さえ込み、ただなすべきことをするため
に真っ直ぐと霞美さんの素顔を見つめた。うん、なんとかなりそう
だ。

「なぜ嫌がるのですか？ こんなにお綺麗なのに、いつまでも見て
いたいぐらいです。おっと、突然失礼でしたかね」

歯の浮くような台詞だった。

僕ってば役者にでもなれるかもしれないな、と内思いながらも

熱い視線はそらさない。

「僕は嘘はつかないんです。柔らかかそうで透き通るような肌、整った目鼻立ちはお父様似ですかね」

「あの、それって」

「何度でもいいますよ。僕は嘘はつきません。思ったままのことをいつているだけですから。だからもつと自信をもってくださいね」

最後に取っておきの笑顔をお見舞いしてみると、霞美さんは照れたように頬を染めうつむいてしまった。

それと同時に部屋中の家具がその場に落ちる音がした。中々の轟音なせいか人がこの部屋に向かってくる慌ただしい足音が聞こえてくる。

「それではちょっと失礼します。後片付けが残ってるみたいですから」

部屋の入口付近で意地悪な笑みを浮かべる恋歌さんを見ると、わかってますよ、というアイコンタクトが帰ってきた。

霞美さんの憧れを壊さないように、できるだけ優雅な動作で部屋から去る。

「……それじゃ最後まで聞かせてくださいよ。僕はきちんと協力したんですから」

「ところで有理君。あの笑顔は反則だと思っわよ。以後封印ということだ」

微妙に頬を染めながら恋歌さんは早口でまくしたてた。僕としてはさつさと事の真相を説明してほしかったんだが、まあ珍しい表情が見れたからよしとしておこう。

一歌(6)

「それにしても、有理君って役者むいてるのかもね。普段無表情なせい意識して丁寧に表情を変えられるみたいだから」

褒め言葉のはずなのにまったく嬉しくなかった。

霞美さんをお手伝いさんにまかせ、僕たちは最初に訪れた宮城さんの私室へと通されていた。時刻は日付が変わる少し前、けれど屋敷内はどこか明るい雰囲気満ちているようだ。

「いやー、ほんとうにありがとう。まさか久しぶりに娘の顔を見ることができるとは……しかもあんな笑顔。ほんとうに、ほんとうに感謝の気持ちで一杯だよ」

感謝されるのは素直に嬉しかったけれど実際それほどのことをしたという自覚もないので、なんだか申し訳なくもあつた。

「いえいえ、私はただ自分の知的好奇心から治療を試しただけですから。今回に至っては乙女の味方もできたみたいですし、こちらこそ感謝したいぐらいです」

よくわからない理論だったが、なんだか恋歌さんはとても満足気だった。

特に乙女の味方というのが気に入っているのか、何度か小さく咳いているのが聞こえる。

「いえ、ですがなんとというかなぜ急に……とは思ってしまいます。何人かの人間が娘を助けようと挑みましたがなんの変化もなく……むしろひどくなっていったぐらいですから」

「そうですね。私は探偵ではないので推理を披露するほどエンターテイナーではありませんが、簡単に説明させていただきましょう」
部屋の中にいた館の主人たる宮城さんを始め、お茶の用意をしてくれた数名のお手伝いにざわつきが広がっていく。

恋歌さんは胸ポケットから伊達メガネを取り出し装着すると、不敵な笑みを浮かべながら語り始めた。

「つまり娘さんは人に顔を見られることを極度に怖がっていたのです」

霞美さんはあんなに綺麗だというのに、贅沢な悩みだった。おかげで僕は恥ずかしい台詞を惜しげもなく披露するはめになったのだ。多少恨みたくもなる。

「勿体無い話ですよね。うら若き乙女が……。けれど、乙女だからこそなのかもしれません。思春期の繊細な心が踏みにじられてしまったのは……」

「それってつまり」

僕が思わず聞き返そうとした言葉は、恋歌さんのアイコンタクトによって遮られた。

「つまり、例えば、例えばですけど、娘さんに近しい人間が顔に対するコンプレックスを植え付けていたとかですね。真相まではわかりませんが」

けれど、恋歌さんの話を聞く限り犯人はひとりしかいない気がした。

娘さんの部屋でポルターガイスト現象が発生するようになってからも唯一彼女と顔をあわせていた人間は、ひとりしかない。彼女の身の回りの世話をしていた側近のお手伝いさんだ。

偶然なのか故意なのか、そのお手伝いさんもこの部屋にいる。彼女は狼狽し、顔を伏せジュータンを凝視していた。

一応メイド服だったりするわけだけど、僕は個人的に彼女をメイドさんと呼びたくはなかった。彼女の年齢のせいもあるけれど、美的感覚的に抵抗があったのだ。まあ女性の好みなんて人それぞれだとは思っただけだ。

「後はわかりません。娘さん自信がポルターガイストを起こしていたのか、自然発生なのか、他の誰かの仕業なのか。事実として彼女は自分に会おうとする人間を危険にさらし続けてしまったことで、深刻なコンプレックスを根付かせていったようですけれど」

僕みたいなのヲヲした男の台詞で霞美さんが救われたとは思え

ない。ただ応急処理ぐらいにはなっていてほしいと思う。

資産家の令嬢で容姿端麗という出来すぎなプロフィール。妬まれるには十分すぎる。

まあ、こんなお金持ちな屋敷のことだ。原因さえわかれば後は専門的な人たちがなんとかしてくれるだろう。

能力を使ったのは、本人か、それ以外の人か。そんなのはきつと些細な問題だ。僕たちにとっては今日の体験そのものが貴重な財産となる。

「では私はこれで、人間の気持ちにはあまり興味がないので、後の処理はおまかせしますわ」

恋歌さんはあっさりと踵を返すと屋敷を後にするように部屋を出た。それにつられて後を歩き出した僕の後ろで騒がしい声が聞こえる。

たしかに、怒声やヒステリーな声を聞くのはあまりいい気分ではなかった。

一歌(7)

「有理君。なんだっけ、この世の現象にはすべて理由があるだっけ。昔それと同時に私がいった言葉、覚えてるわよね？」

「理由がないのは人の心ぐらいなものだ。ですか……」

屋敷の玄関を抜け駐車場へと向かう最中、僕は恋歌さんの言葉に納得せざるを得ない。

人の心の複雑怪奇さは特になんの理由もなく行動を決定し、ひどく簡単に人を傷つける。それらすべてに理由や原因を求めるというのはナンセンスなのかもしれない。

「やっぱりその言葉も信じないのですか……。ベタベタな女の嫉妬だったとか、いじめだとかそんなんで納得してちゃダメですかね」
僕はどちらかというところこの言葉は信じたくはなかった。

人の思考すらも理解したいなんて傲慢なことを心のどこかで思ってしまったているのかもしれない。

「そうね、それじゃあ一つだけ質問」

恋歌さんは意地悪なだけれどとびつきり魅力的な表情で微笑みながら僕の猫毛な頭を撫でた。

「有理君が私のこと好きなのって理由がある？」

容姿が綺麗だからとか。

性格が魅力的だからとか。

一般的な答えはいくつかある。けれど、それらはすべて本質的な意味では答えになっていないように思えた。人間の本能というか子孫を残すためのシステムなんかを説明するというのも屁理屈だし……
ロマンもヘツタクレもない。

なんとというか、恋歌さんはこういう部分では乙女心一杯だった。

「答えになってないですけど、あえていうなら心がドキドキするからでも答えておきましょう」

「よし、それでいいのだよ。少年」

頭をくしゃくしゃと撫でられる。

子供扱いされるのは妙な気持ちだ。嬉しくもあり、恥ずかしくもあり、そして、悔しくもある。

結局僕はお手伝いさんと霞美さんがどうしてあんなったのかわかる術もなく、恋歌さんと仲良くお屋敷を後にする他にないのだろう。まあ帰りたくないわけじゃない。夜も遅くなってきたしさつさとふかふかの布団に包まれて、眠りにつきたいという人間的欲求が増してきている。

「それじゃ執事さん。色々と恋歌さんがご迷惑をおかけしました」「いえいえ、ありがとうございます。お嬢様の笑顔が久しぶりに見れて嬉しいかぎりです」

僕たちを駐車場まで送りにきていた執事さんは表情をゆるめながら深々と頭を下げてきた。

この日最深のお辞儀だった。

人に感謝されるのは、悪くない。

「あら、お嬢さん……。もう玄関まで出てきて……。ほんとうに元気になるようにですね」

執事さんの後ろ開かれた玄関の扉の影。遠目ながらに、可愛らしいパジャマ姿のままこちらを覗き込む霞美さんの姿が確認できた。

「乙女心ねえ。まったく有理君も可愛い顔してやるものだね」

「それじゃあ失礼しますね。どうもありがとうございます」

恋歌さんの言葉をスルーしてさつさと車の助手席へと向かう。

もしかして、僕は取り返しのつかないことをしてしまったのだろうか。

数分後エンジンがかかり、動き出した車のミラーから見えた霞美さんの笑顔は魅力的だった。けれど、その姿が遠くになっていくほどに、どこかホツとしている自分がいた。

一歌(8)

「恋歌さんタバコはどうかと思いますよ」

「あら、仕事終りの一本ぐらいいは見逃してほしいものだわ。こんな時ぐらいしか吸わないんだから」

深夜の道路は空いていて嫌いじゃない。二人乗りの藍色軽自動車は軽快に速度をあげ、家路を急いでいた。

そんな中タバコを吸うおうとする恋歌さんに冷ややかな視線を向けてみたりする。

「有理君。ライターくれると助かるかな、なんて」

「はいどうぞ」

自分でも驚くほどに一瞬にしてライターを手渡すことができた。

どうやら、超常的な力が発動してしまったようだ。超スピードなんかじゃない、ただライターを渡したという結果だけが残る。そんな奇妙な体験。

……よくよく、思い出してみれば別に驚くことではない。僕はもともとこの手の力の片鱗が使えたりしたはずだった。

ぶすりと僕の首筋に痛みがはしる。

「恋歌さん……、唐突ですね」

「がぶ、がぶ」

別に血を吸われているというほどではない。ただ少し犬歯が発達していて痛みが走るだけ。でもきつとまた僕の首筋は絆創膏のお世話になるだろう。

「信号機青になったら教えて」

息継ぎのために顔をあげた恋歌さんが早口で呟く。

首筋を年上のお姉さんに噛まれながら目の前をぼーっと眺める。

しばらくすると、信号機がチ力チ力と赤色へと切り替わった。

「信号、変わりましたよ」

首筋を噛まれて数秒後、後ろに並ぶ車に迷惑をかけるわけにもい

かないので、仕方なく声をかける。実をいうと僕はこうやって首筋を噛まれるのが嫌いじゃない。

好きな人と密着したいというのは当然の願望だし、慣れたせいか、チクリとした痛みがなんだか心地良かったりもする。どうやら僕はだめな方向に進んでしまっているようだった。

「まったくいやな体質だわ。自分でもね。ニンニクも十字架も陽の光も苦手なんてベタにもほどがあるわよね。どうせなら不老不死とかにしてくれればよかったのに」

「無茶をいわないでください。人間、できることしかできない、ということじゃないですかね」

「有理君は現実主義ね。そんなのじゃ人生楽しめないわよ」

「そんなことないですよ。僕は恋歌さんのおかげで毎日楽しいですから」

心なしが恋歌さんの頬が染まった気がした。

普段あまり見せない隙だったので、こういう光景は貴重だった。

「僕だって読みきり連載漫画の主人公みたいな体質だったのが、恋歌さんのおかげで日々平凡に暮らせてるんですから」

「昔読んだ小説の吸血鬼が血を吸うことで主人公の能力を無効化したからって、今でもそのイメージを忘れられないんだから、驚きよ」

恋歌さんは吸血鬼だった。

僕は能力者だった。

なんて考え方をしていると恋歌さんにぶっ飛ばされそうだから訂正すると、恋歌さんはニンニクや十字架や陽の光が苦手で、犬歯がちよっと発達した時々人の首筋に噛み付きたくなるだけの体質だった。

僕はといえば、ただほんの少し人と違った力を使えるだけだった。自分でもあまりに使わないせいで、というよりも使えないせいで、どんな力を使えるかすら、正確なことはわかりはしないけど時々あやまって突然変な現象を起こしてしまつて、その度に自分で驚いたりしてしまつて。

「超常現象的ですね」

首筋を押さえながら、再び車の運転に集中し始めた恋歌さんに語りかける。

「そんなもんじゃ断じてないわよ。どこかに理由があるはずなんだから……。今回だつてきちんと治療できたのに自分の症状が治らないんじゃ意味ないわよね」

「いいじゃないですか、ああやっっているんな症状を見ていればそのうちなんかヒントが出てきますよ」

今回だつてうまくいった。

ならいつかは恋歌さんの体質だつて元に戻せるのかもしれない。

「まったく人の心は複雑怪奇よ。不思議現象だつて起こせるんだから」

「大概の人は起こせないですけどね」

それほど簡単な話でもないはずだ。そんなに簡単に謎パワーに人々が目覚めたとあれば世界はほんとに漫画雑誌みたいになってしまふ。

「それもそうね。所詮治せる症状なんて風邪みたいなもんよ。だから私も風邪なの、風邪が長引いてるだけなの」

「そうですね。そういうことしておきます」

そつけない返事で恋歌さんを励まそうとしたが、効果はなかったようだ。

家が近づいてきたのか車の速度がさがっていく。

「さて、今日も終わりですね」

「そうね、仕事も終わったことだしゆっくり眠れそうだね。有理君はどう？」

「僕ですか……。そうですね」

一呼吸ため、あの時の表情を思い出す。

「恋歌さんのせいで首筋が疼いて火照つて、大変な夜になりそうです」

霞美さんに見せた封印している笑顔をお見舞いしてやった。

恋歌さんは声にならない声をあげ、あやうくバック駐車で庭園に突っ込みそうになっていた。

今日一日分の意地悪へのお返しといったところだ。僕は恋歌さんの可愛らしい呆け顔が見れたので、存分に安眠ができそうだと清々しい気分で家の玄関をくぐるのだった。

一歌(8)(後書き)

なんとか一話目(一歌目)終了です。

正確には後、一話分ほど、エピソード的なまとめ話がありますが
……。なんとなく雰囲気を掴んでいただけてたら幸いです。

一歌（縁側）

縁側でぼけーっとしながら、一息。春の中頃、休日のさわやかな過ごし方。

庭には朝日が注ぎこみ、草木が気持よさそうに揺れている。それを見ながら、淹れたての緑茶をひとすり。

今日は目覚めも良かったし、朝食用に作ったオムレツも綺麗な半熟具合で、朝から清々しい気分。課題やレポートなんかは忘れて、今日は一日のんびりと過ごそうと心が揺れる。

そんな中、

「あー頭痛い、有理君、お茶」

「恋歌さん、昨日遅かったみたいですね。大丈夫ですか？」

頭を押さえ、目元にうつすらとくまを浮かべた恋歌さんがからんでくる。春といっても、蒸し暑い日が続いているせいか、Tシャツにホットパンツというかなりラフな格好だ。

「うー癒される。癒されるよ、このさらさらの髪の毛に、ちっちゃい身体」

「恋歌さん離れてください。お茶が入れられないです」

直に伝わる恋歌さんの感触にどきまぎしつつも、冷たく引き剥がそうとする。

ホントはとても嬉しい事態なんだけれど……。

「恋歌さんまたお酒飲みましたね。眠気覚ましになってるんですか、ほんとにそれ」

「なーにいつてんのよ。やっぱり夜中の作業には酒でしょ、酒！」
仕事終わりのタバコと、作業の景気付けの酒。機会は多くはないはずだけど、こんな時ばかりは愛する女性もおっさんくさく見えてしまっ。

「僕は恋歌さんの身体だけ心配してます」

「苦勞をかけるねえ、おまえさん」

「それは言わない約束だよ……。ですか」

「ゆーり君。ノってくれたのはありがたいけど、その表情は止めて、なんだかいたたまれないわ」

僕がジト目になっていたせいか、恋歌さんが素に戻る。そして、差し出したお茶で一服、バツの悪そうな表情でこちらをチラ見。

「あのね、これはその、ちよつとだけよ、ちよつとだけ。前みたいにかバカバカやってないわよ」

「そこは信じてあげます。恋歌さんも仕事で忙しかったみたいですし」

僕がほぼこつちの家に住むようになってからは恋歌さんの生活習慣もそれなりに改善されているので、実はそれほど心配はしてなかったりもする。

甲斐甲斐しく世話をし続けた結果だった。まるで通い妻みたいだ。

「なんの仕事だったんですか？」

「ん？ これよ、これ」

「ああ、何時ものレポートですか」

僕らが出会った複雑怪奇な異常現象。

それを『報告』するのが僕らの仕事で、何も人助けに四苦八苦ししているわけじゃない。もつとも、自称乙女の味方な恋歌さんに引張られ、結果的に人助けに走るなんてのはありがちな展開だけれど。「機関、からのレポート……。それも報酬の一つですけど、僕はお給料の方だけ気にしてます」

「まあそつちの支払いも中々のもんだったわよ。もつとも、今回は依頼主さんからの直接報酬の方が大きかったけど」

宮城さん……。さすがは金持ち。それなりの規模やら権力やら財力をもっているはずの僕らの上司の支払いより羽振りがいいなんて、よほど今回の仕事に喜んでくれたようだ。

「でどうだったんですか霞美さんは？」

「あら、気になる、やっぱり。ふっふっふ」

気持ち悪い笑いを浮かべながら、恋歌さんが詰め寄ってくる。

「まあ教えたげる。結果はシロ。ほとんどただのパンピーよ。組織からの評価も最低ランクのD」

それはよかった、ほんとうに、アレはただの風邪みたいなものだったのだろう。

「その方が幸せですね」

「そりゃそうよ。これからはあの子も世間一般の乙女よろしく、恋にお菓子に大忙しでしょうから」

今まで引き籠っていた分、そうやって青春を是非謳歌してほしいものだ。

「まあ今回は乙女の心を傷つけたせいで起こった、超常現象だったわけだけ」

それほどまでに乙女の心は、巨大なパワーを秘めているようだ。

少なくとも僕なら顔のことを言われたぐらいでは、不思議パワーに目覚めるような感情の起伏を感じることはできないだろう。

「兎にも角にも、女性の心はデリケートなんですね」

「恋は顔でするものではないんだけどね」

さらりと、乙女のようなことを言いながら、恋歌さんは縁側で寝転び大の字を表現。

「今日はなんもしない、ぼーっと過ごす」

「それは良い休日の過ごし方だと思います、この前大学の帰りに良なお茶請けを買ってきたんです。生もみじですよ、生もみじ」

恋歌さんの世話をするため、縁側から腰をあげる。

どうやら僕にとってのより良い休日の過ごし方というのは、この人の世話をすることだったらしい。

一歌（縁側）（後書き）

というわけで、一話目がやっとこさ終了です。

この縁側はエピソードという名の、まとめタイムです。私の場合、よく話を抽象的なまま終わらせたがるので、このような話が必要に……。

こんな感じで二人の活躍をいくつかの短編にわけて公開していきますので、よろしければお付き合い下さいませ。

二歌(1)

二つ返事は君の悪いところだ。
というのが、彼女の口癖になりそうな勢이었다。

「はい、どうぞ恋歌さん」

「あ・り・が・と・う。有理君」

のどかな縁側、差し出した緑茶が乱暴に奪われる。

きつい視線な気分は終わったのか、今は妙に落ち着いた、感情のない視線が日本庭園の池の方に注がれる。どうやら恋歌さんはご機嫌斜めなようで、僕としては気が気でない。

「怒ってますか、恋歌さん？」

「……有理君、そんな質問は論外よ。女性の機嫌をさらに悪化させる意味しかないのだから」

どうやら僕のフォローは失敗だったらしく、恋歌さんの整った顔立ちがほんの少しばかり歪んで見えた。

ああ、またやってしまったと、ひそかにうな垂れる。できることなら今すぐベットに横になって、嫌なことはすべて忘れてしまいたい。そして夢の中でくらいは好きな女性とイチヤイチャ幸せに過ごしたいものだ。

「だいだいだね、ユーリ君。君はお人好しなのかただのめんどくさがりなのか、人の話を安請け合いしすぎだよ」

「それはもう、返す言葉もございません」

縁側、恋歌さんの隣に腰掛けながら軽く頭を下げた謝罪する。

が、実のところあまり反省してなかったりするのだから夕チが悪い。というよりも、この年になると自分のそういう部分を割りきってしまつて、治そうにも治せないと決めつけてしまっているのが悪いところだ。

「……どうせ言っても無駄なんでしょうけど。所詮は人の長所も短

所なんてのは同じ物なんだから」

「仰る通りでございます」

恋歌さんはそんな僕を一瞥してから、深い溜息をつくど、あきらめたように立ち上がった。

「わかりました、わかりました。そんなあなたと雇用契約してしまった私の負けでございます」

機嫌が治ったとは言いが、一応の及第点。

恋歌さんは仕事モードに入ったのか胸ポケットにしまっていた伊達メガネを取り出し、キリリと瞳を釣り上げる。

「さて、連れてってもらおうよ。依頼者の家までね」

二歌(2)

事の始まりは僕が大学のテスト前に、必死こいて食堂で勉強していた所からだつたりする。

夏の訪れの迫る春の終盤、期末テストだけで評価するのは可哀想だと、生徒思いな先生方の配慮によって中間テストなるものが行われる。

バイト、と称して恋歌さんのところに入り浸っている僕にとって、とてつもなく重大な単位という壁。この単位ポイントを貯めないと卒業できないように、大学のシステムは出来上がっているわけ……。

「やばい、まじやばい」

中間テストが行われる授業まで残り3時間。時間は充分あるくせに、覚えることはまだまだたくさん。

この日のためにとある通販サイトで購入した先生制作の教科書という名の哲学書は、分厚さだけで内容がさっぱり入ってこない。少なくとも僕には合っていないシロモノだった。

「どうしよう、どうしよう」

要点を押さえ、勉強してはいるものの、不安は消えてはくれない。危なく独り言を呟き始めている時点で、僕にしては相当に焦っていると判断できた。

早朝の食堂は空いているが、さすがに中間テストの前だからか、チラホラと生徒の姿が見えた。周りの連中も似たようなものらしく、彼らの焦った様子がさらに僕の心配を加速させる。

こんな事なら普段から真面目に授業に出て、勉強していればよかったとまでは言わないが、テスト一週間前から対策に乗り出すべきだった……。

なんて、できもしない反省を繰り返しながら、テキストを消化していく。

「……あの、有理君？　もしかしてお困りです？」

「え、ああ、草薙さん？」

そんな僕に話しかけてきたのは、クラスメイトの草薙さんだった。ふわふわとした髪型のままに、どことなくふるふわとした雰囲気の女の子。そんな大学生らしい女の子が、僕にどんな用事なのだろう。

残念ながら、大学に真面目に通っているとは言い難い僕は学科からは浮き気味だというのに。

「あ、あたしの名前ちゃんと覚えててくれたんだね！　美香、嬉しいな！」

「いや、まあ一応同じ学科だしさ」

感極まったのか、一人称を自分の名前にしながら喜びを表現する姿は、素直に可愛いと思えた。

僕の一般的な感性はなんとか維持できているらしい。女性の好みなんてのは、恋歌さんのせいでめちゃくちゃに歪んでしまったらうけれど。

「だって、有理君あんまり大学来てないしさー、この不真面目さんめ！」

草薙さんは食堂の奥、窓側に腰掛けた僕の隣に座り込むと、ペラペラと話題を膨らませていく。

この前の休日に友達とカラオケに行っただの、

この前の飲み会で行ったあの店がよかったの、

この前のバイトの時店長がうざかったあの、

話が進みすぎて一周したのか、話がこの前の休日に戻り始めたその直後、草薙さんはやっと必死でテキストに貼りつく僕の姿に気づいてくれたらしい。

「あー、なりほどね！　哲学のテスト対策ってやつか」

「そうなんだよね。正直、草薙さんと話してる余裕、ないかも。頭の中、ソクラテスとかプラトンで一杯」

僕としてもクラスメイトを邪険に扱いたくはなかったが、しょう

がない。それぐらい単位というのは重いのだ。

「ふっふっふ、じゃっじゃじゃーん、これ、何かわかるかなー？」

そんな僕の訴えなどなかったかのように、草薙さんは可愛らしく自分で効果音をつけながら、何かを取り出した。

「これ、先輩とか友達から貰ったの、あたしなりにまとめてみたんだけど……」

そこに現れたのは、哲学のノートっぽいものだった。見た感じ丁寧で、かつ色分けされてまとめられており、過去問対策つまで網羅されている。

「そ、それ！」

「だめー！」

ガッ！ とほぼ無意識で突き出した右手は、草薙さんによって防がれた。行き場を失った僕の右手が虚しく宙にとどまり続ける。

「えーっと、あたしのお願ひ聞いてくれたら、見せてあげてもいいかなーなんて」

「なに、なに？ 今ならなんか大抵のことにうんといいいそうだよ、僕」

思えば、この時点で僕は正常な判断能力を失っていた。

完全な安請け合い。恋歌さんに相談もせずに依頼を受託。結果、僕の手にもえない内容だったために恋歌さんに泣きつくハメになっ
てしまったのだった。

二歌(3)

「ストーカー事件なんて随分とベタなものね」

「それが結構悪質みたいで……」

恋歌さんに協力をお願いした最大の理由。それは今回の相手が暴力を振るってくる可能性があったからだ。

残念ながら一般的な成人男性どころか、近所の中学生なみの体力、腕力しかない僕にとって、リアルファイトというのは中々に難易度が高い。

「恋歌さん、この前の鍛錬、またお願いしますね」

「まったく、有理君は読み切り漫画の主人公みたいなチート能力持ってるっていうのに、弱いつたらありやしないのね」

そのチート能力は恋歌さんの吸血行為によって封印されているわけで、そもそも僕は自由にその能力を操れた試しがない。

つまり、僕なんていうのは世間一般の大学生にも劣るただのもやしっ子でしかないのだ。

「恋歌さんもやっぱり強い男の人とかが好きなんですか？」

「そんなの気にするわけじゃない、だって私の方が強いもの、それはそうだ。」

恋歌さんが体得している武術は腕力の差なんてハンデにならないかのように、相手の力を利用してはいる。ちぎっては投げ、ちぎっては投げ、なんて無双する光景を何度か見せられた。

曰く、合気道的なそうでないような、ものらしい。

もっとも、そんなスキルがなくなったら、恋歌さんなら口八丁手八丁で暴漢なんかどうにかしてしまっただけ。

「あ、ここです、このアパート」

「依頼主のお名前は……、草薙美香さんね。お金にはならないけど、たまにはいいわ」

恋歌さんは愉快げに口元を釣り上げると、スタスタとアパートの

玄関へと向かっていく。

確かに今回の仕事はお金にならない。まあ、僕らが行っているこういう行為は、慈善事業みたいなもので、恋歌さんがごその調査機関に報告している超常現象レポートの対価こそが、僕らの飯の種なのだ。

「なんていうか、いよいよもって、なんでも屋が板についてきたみたいですね」

今回にいたっては、超常現象すら関係ないわけで。

まあ、僕としては単位の……行く行くは卒業のかかった大事な交換条件だったから、仕方がない、となんとか納得しておくことにした。恋歌さんも、大学ぐらいは卒業しろって五月蠅いし。

「なるほど、これがアパート用の郵便受けね」

「それもあさられたりしているらしいですよ」

恋歌さんが部屋の番号を指で確認しながら、郵便受けの中を覗き込んだ。

僕もその後ろでこっそりと覗き込む。単調で派手な彩色が施された広告チラシが数枚、押し込まれていた。どこのアパートも同じようだ、僕も部屋に帰るといつもこんなのが待ち構えている。

「ピンクチラシ、見る？」

「なんでですか……」

適当に選びとった一枚のピンクチラシを手に取り、恋歌さんは僕の目の前でチラチラさせる。

それにどんな意味があったのか、考えるまでもない。こんなのはただのセクハラでしかないのだ。

二歌(4)

「あ、有理君こんにちわ！ 美香、待ってたんだよ！」

「こんにちは、草薙さん」

アパートのチャイムをならすとすぐさま元気に草薙さんが飛び出してきた。

「こんにちは、恋歌です」

「えっ……… しません、どなたですか？」

僕が事情を説明する暇もなく、恋歌さんがすつと間に入って自己紹介を始める。

「一応、有理君の上司にあたるものですわ。なんでも、お困りのよう。是非当社がお助けしますよ」

普段自分たちのことを『会社』なんて思ってもいなくせに、白々しい台詞だった。

「ええつと………、そうなんですか」

草薙さんは引きつった笑いを浮かべながら僕らを招き入れるようにドアを引いた。

「お邪魔します」

靴を脱ぎ、少しドギマギしながら家へとあがる。

ほんのりと芳香剤の臭いが鼻孔をくすぐる。そんなところに女の子を感じながら、ゆっくりゆっくり足を進めた。

「有理君。どしたの、はやく」

さくさくと奥まで進んだ恋歌さんは案内されるままに座布団の上に腰掛け、差し出された麦茶をすすっている。

やはり機嫌は未だ良くなっていないようだ。

「すみませんね。一人増えてしまっ」

「うん、いいの。さあ有理君も座って」

あわてて用意したのか、新しい座布団と麦茶を持って草薙さんが僕の方を向いた。

恋歌さんの対面側に置かれた座布団の周りには、ぬいぐるみやら可愛い小物が転がっていて、そんなところで一々自分との違いを感じてしまう。

「えーっと、それじゃあその相談に乗ってくれてくれるってことですよね」
「ええ、私たちはそのために来ましたから」

草薙さんも僕の傍に腰掛け、さっそく話を切り出した。

テスト対策の交換条件として要求された『依頼』。それは彼女に付きまとうストーリーカーの影を見極めること。

「そうですね、最初は郵便受けの中身が勝手に持ち出されたりとかです。マンションの入り口にあったのが、勝手に？ 自室の郵便受けに入れられてたり」

学校に行く前に確認した封筒が、勝手に移動したりといった違和感が続いているようで、草薙さんは怯えたように話を続ける。

「気のせいだとは思ったんです。あたしも無意識にやったのかなとか……。でも、例えば最近は部屋の中で妙な人影を考えたり、物が微妙に動いてたり……」

「その言い方からすると、やはり違和感があるという感じで、ストーリーカー本人を確認したわけではないのね？」

「そうですね。なので今回もそのストーリーカーの影がないかをきちんと調べてもらって、いないならいないで安心したいなっというのが本音です」

恋歌さんは仕事モードに入ったのか、顎に手をあて考えこむような姿勢をとる。

「わかりました。それなればきちんと調査いたしますわ。あなたが安心できるように」

「はい、お願いします」

突然現れた見知らぬ人物に最初は戸惑っていた草薙さんも、恋歌さんの気配に押されたのか、すっかりこちらのペースに巻き込まれている。

ある意味、何時もの僕らの仕事と変わらない雰囲気だった。

二歌(5)

「とは言ったものの、私たちは探偵じゃないから、ストーカーの考える事なんてわからないわけよ」

「それじゃあどうすればいいんですか？」

草薙さんの部屋を調査の名目で一通り確認した後、外に出てきた僕はマンション外側の郵便受けを物色しつつ言葉を交わしていた。「物が動いたり、なくなったり、ぶつちやけ殆どの場合が気のせいではあるのだけど。曰く、ポルターガイストやら妖精さんのイタズラやらつてね……」

「でもストーカーですよ、ストーカー。さすがに勘違いはないんじゃないんですかね？」

「まったく、有理君は乙女心がまるでわかっていないわね」

恋歌さんは郵便受けから適当な郵便物を手に取り、何かを確認すると、取り出したケータイでどこかに電話をかけた。

「あ、ども、クロネコさん？ さっそくだけどちよつと調べてもらいたいことがあって、なーに、簡単よ、簡単。多分あなたのネットワークだけで終わる問題だから」

ああ、クロネコさん相手か……と嘆息する。

クロネコさんというのは、変な名前の変人だ。ただおまげや趣味程度に情報屋のような仕事をしている関係で、僕らも世話になることが多い。

「ええ、ええ、住所は。私達の事務所からちよつと歩いた所ねえつ、直接会いに来ないのかですって？ いえいえ、そちらも忙しいでしょうし、今回の案件ぐらいメールで充分……わかりました、わかりました行けばいいんですよ」

あの恋歌さんが、若干焦ったように対処する。

そんな相手は僕の知る限りで二人だった。一人は僕らの社長さんで、もう一人が情報屋のクロネコさんというわけだ。

「ふー、疲れた。有理君、クロネコさん。あなたに会いたがつてるみたいよ」

「それは勘弁願いたいものです。あの人苦手なんで」

もつとも、あの人を得意とする人なんていそつにもないけれど。

恋歌さんがこちらに詰め寄り、がちりと僕の肩をつかむ。まあ、

こんな事になるんじゃないかと思つてたけど。

「お・ね・が・い・ね。ユーリ君！」

「はっはっはっは、恋歌さん、顔が怖いですよ」

有無を言わせぬ、命令だった。

まあ今回の事件は僕が持ち込んだようなものだし、気は進まないが、仕方がない。草薙さんのアパートも、僕らの事務所やクロネコさんの根城と地味に近いというのもタイムリーだ。

歸りに、クロネコさんのトコに歩きで寄つて行こう……。どうせ、

恋歌さんは付いて来てくれないだろうけど。

「にしても、これはこれは、予想外に楽しめそうだね。今回はかりは乙女の味方にはなれそうもないけれど」

恋歌さんがにやりと笑い、楽しそうにスマートフォンを操作する。

「うん、目処もたった、これで研究者としての活動ができそうで私は満足よ」

そしてスタスタと早足で歩き出す。

よほど楽しい発見があつたのか、どう見ても『ただの』ストーリーに対応するテンションではない。僕らの研究対象はいわゆるオカルトなんて呼ばれるものだからして、今回もやはり平凡無事には終わつてくれそうもなかった。

二歌(6)

「これはこれはこれは、有理君。首をながくしてお待ちしていましたよ」

えらいオーバリアクションで、黒のコートをはためかせるスタイルのいい男が、出迎えるに現れた。

「どうも、お久しぶりです。クロネコさん……」

恋歌さんと別れ、一人いつも待ち合わせに使っている電柱の前。

ここから徒歩10分ぐらいの、僕らの事務所へ帰りたくて仕方がない。

「しばらく見ない間に、また成長されたようですね。男子三日会わざれば刮目して見よ、なんちゃって」

そつと僕の頬を撫でながら、心底嬉しそうに笑う男は、長めの前髪からのぞく切れ長の目をキラキラと輝かせている。いちいち、バツ！ とか ドド！ なんて効果音が聞こえてきそうな機敏な動きは、実際こんな普通の街路で見る限り、不自然でしかなかった。

近所に立ち並ぶ、一軒家やアパートの住民に見られてやしないかと、自意識過剰に辺りを見回してしまう。

「さて、いつものお約束。われわれ、悪の組織にいったいぜんたい何のごようですかね？」

頭にかぶったシルクハットを右手で押さえながら、黒のスーツの上から羽織ったコートが風もないのになびいている。曰く、これが彼にとっての正装で、悪の組織としてのプライドなのだそうだ。

「悪の組織って……これがですか？」

クロネコさんの足元に、どこからともなく野良猫たちが寄ってくる。時間がたつといつもこうだ。さすがはクロネコ、と名乗るだけあって、猫には好かれているようだ。

「そちらの皆さんは私の同士ですよ。全国に広がるネットワークの構成要員なのでから」

「ほんとに、古風なインターネットですよね」

クロネコさんの持っている情報網の詳細まではわからないが、どうやら彼は小動物に好かれているようで、動物たちの力を借りたネットワークを形成している。知りたい情報はどこからともなく、構成要員とやらが持つてくる。本当に便利な情報屋。

「恋歌さんから聞いている通りです。人助けのため、ご協力お願いします」

「はい、わかりましたよ。こうやって直接会っていただけましたし、恋歌君のおかげですでに報酬も振り込まれております。と、いうわけではいい、どうぞ」

コートの下から、さっと取り出される一枚の茶封筒。

それを受け取ると、開けて中身を確認したい気持ちを抑え、脇に抱えた。クロネコさんは、執事みたいにお辞儀しながら、こちらをニマニマと見つめている。

これ一枚渡すだけでいいのに、さっさと最初に出しやがればよかったんだよ、という気持ちが膨らんでいく。

「最近楽しいですか？」

「楽しいですよ」

「最近仕事は儲かっていますか？」

「ぼちぼちですね」

「ふふ、聞きましたよ。宮城邸での活躍」

「それはどうも」

「どうぞ、存分に正義のために働いてください」

「そうさせて、いただきます」

最初っからすべて筒抜けだというのに、今更何を聞くつもりなのか……。受け取るものは受け取ったわけだし、さっさと帰らせてもらいたい。

「そういえば……最近人を殺しましたか？」

「……」

途端、鋭い視線が僕を睨む。クロネコさんは僕の中の奥の方を探

るよつにこちらを見ていた。

「冗談ですよ、冗談。相変わらず、恋歌君はあなたをきちんと教育されているようで、羨ましいかぎりです」

「なにがですか、なにが」

まったく……。

この人、ほんと何考えているかわかんないな。

二歌(7)

「うっはー。いやーひと仕事終わると気持ちがいいわあ」

草薙さんから依頼を受けた次の日、早朝から恋歌さんは変にハイテンションだった。

昨日クロネコさんの相手をしたせいで、なんとなく精神的に披露した僕にその元気をわけてほしいもんだ。おかげで、昨日は事務所に帰ってきてから爆睡してしまった。

「コーヒーは自分で入れてくださいね。好みもありますし」

「ういー、了解」

仕事熱心とは到底呼べないような先輩ながら、これほど働いたというのは、趣味に関しての並々ならない情熱が発揮されたからだろう。こういうのも、趣味を仕事にしているとかいうやつかもしれない。もしくは自称研究者の探究心というやつだろうか。

事務所のキッチンでノホホンと朝食を作っていた僕は、追加で恋歌さんの分の卵を手取る。

「オムレツでいいですよね？」

「お願い、いつも通り、いや、いつも以上にふわふわのじゅくじゅくで」

Tシャツと、ジャージというラフな格好。

襟をパタパタさせながら、ぐったりと食卓の椅子に座る。ちらちらと何か柔らかくて幸せがまつてそうなものが見える。

胸とか、そういうの気にしてほしい……。もちろん、見たくないわけじゃないけど。

「結局、徹夜ですか？」

キッチンの作業スペースに向き直り、それなりに集中。

フライパンの熱に細心の注意を払いながら、といた卵を投入する。

「そうよそうよ、クロネコさんの情報がビンゴでさー、つついし

なくていいのに報告書までつくっちゃったわよー」

卵が半熟で仕上がるぎりぎりのタイミングを見計らい、フライパンの縁でオムレツの形を整えていく。

「っていうことは、やっぱり超常現象がらみなんですか？」

「たしかにモノが無くなったり、動いたりってのはさー、超常現象にはありがちだよ。だけど、それと今回のが繋がってるってのはどうなのかなー」

ニマニマと恋歌さんが笑っている。

ああこれは僕をいじめている時の顔だと理解した。理解した時点で、今回の事件にオカルト的な要素が含まれているのは明白だった。どうぞ、恋歌さん」

「ありがとう、やっぱり徹夜明けは熱々のコーヒーとコレにかぎるわねー」

自分で入れたらしいブラックコーヒーを飲むことで、恋歌さんの表情が微妙に覚醒していく。……ような表情。

「コーヒーってそんなにいいものですか？」

「そうねー、ブラックの美味しさのわからない有理君に教えてあげると……。これがあると目が覚めるし、気が引き締まるのよね、なんとなく！」

「なんとなく、ですか……」

なら、僕は甘々のミルクで砂糖なコーヒーで充分です。

「さて、朝御飯終わったら行きましようか、我社は迅速解決がモットーですから」

「そんなモットー初めて聞きましたよ」

なんだかいつもよりも、恋歌さんは今回の案件に対するモチベーションが高い気がする。

よっほど草薙さんを助けたいと思ってくれているんだろうか。

「結局僕はクロネコさんのところにおつかいに行っただけなのに、もう解決ですか」

「いやー、私もびっくり。こんなスムーズに終わるなんて……。気

分がノっちゃって、報告用の資料も一晩で出来ちゃったし」

これが恋歌さんの本気というやつかもしれない。基本、やればやるほどできる人だから……。

「あ、やっぱりちよっと待って、このオムレツいつもより美味しいから、いつもより時間をかけて味わうわ」

「それはどうも、是非ゆっくり味わってください」

褒めてくれたのは単純に嬉しかった。

恋歌さんは、オムレツを一口食べ、なにやら頷いた後に、ちまちまコーヒーを飲むという作業を繰り返している。どうやら、出発まではもう少しかかるらしい。

二歌(8)

「こんにちは、草薙さん」

「ど、どうも……」

引きつった顔で僕らの招き入れる草薙さん。

そんな彼女なんかお構いなく、音符マークがつきそうな満面の笑顔でズカズカと上がりこむ恋歌さん。

二人の両極端な反応に、僕まで表情が引きつってくる。

「すみませんね、朝から。お昼ごはんの時間までには帰りますので」

「は、はあ……」

「急にごめんね、ほんとに。でも、草薙さんの身に何かあってからだと遅いしさ」

「うん、有理くん！ ありがとうね、心配してくれて」

草薙さんは元気を取り戻したようで、昨日と同じようにリビングまで僕らを案内した。

「で、どうでしたか？」

座布団の上に腰掛けると、いかにも心細い表情で草薙さんが切り出す。ストーリーカーがいるかもしれない、というのは女の子にとってかなりのストレスなんだろう。

「依頼の方、ストーリーカーの有無の確認でしたので、結果から申しますと……そういうった人はいませんでしたね」

恋歌さんがキリつとした表情で仕事モードに入る。

けれど、僕は見てしまった。一瞬、草薙さんの方を見て、ニンマリと意地悪な笑みを浮かべた恋歌さんの姿を……。あれは意地悪をしている時の顔だった。

「ええー、こちら調査内容の報告書でございます」

恋歌さんは、胸ポケットにかけてあった伊達メガネをかけると、封筒に入れられていた10枚程度のA4用紙を取り出した。

「恐らく、草薙さんが経験された不思議現象もイタズラあるいは、

気のせいだと考えられます。付近の住民などにも聞いたところ、最近その手のイタズラも増えているようで……詳しくは報告書の4ページをご覧ください」

僕のことは置いてけぼりで、どんどん説明が進んでいく。

今回ほとんど調査に関わっていない僕の出番はありそうもない。

「郵便受けにイタズラされたのはあただけじゃなかったんですね」

「ええ、まあどこにでもある悪い子供のイタズラの一種でしょうね。他の住民の方も少なからず被害をうけているようで……。話を伺った所、大家さんが今後対抗策を行使してくださるみたいですよ」

草薙さんの表情が安心したように溶けていく。

よかった、よかった、やっぱり女性はそういう顔をしているのが一番だ。

「じゃあ室内の異変とかは……」

「そちらは8ページ辺りをご覧ください。出来合いのものですが、簡単に学術的な意味での、妖精論やポルターガイスト現象の情報を載せさせていただきました。まあ、一言でいって『気のせいだった』と思ってくださって結構ですよ。この部屋に生身の人間が荒らしにやってきたなんてことはありませんから」

「冗談交じりに恋歌さんが笑う。」

その様子に安心したのか、草薙さんはほっと一息つくつと満面の笑顔で顔をあげた。

「ありがとうございます。ほんとに……。ありがとうございますね、有理君！」

「えーっと、僕は特になにも」

今回ばかりは本気で何もしていないのだから、そうとしか言えなかった。

しかし状況からいって引つかかることは多い。そもそも、こんな普通のストーカー事件に恋歌さんが報告書なんて大層なものをごさえるはずがないのだ。てつきり今回もオカルトな現象が絡んでいると予想していたし、安心していいなんて言葉、信じられるはずがな

い。

本当に大丈夫なんですよね……、と恋歌さんの方をジト目で睨む。
返ってきたのは、満面の意地悪顔だった。

二歌(8)(後書き)

毎週土曜日には更新するようになっていたのですが、ズレこみ……。
すいません。

次回から解決というか解説編です。本日ももう一話更新予定です。

二歌(9)

「ばいばいユーリ君。ほんとにありがとう。また連絡するね」

「僕は何もしてないよ……。それじゃあ、おじやました」

本当に今回は何もしてない。それがとても気持ちが悪い。

「ご依頼ありがとうございました。また何か御座いましたら、お気軽に、いつでもどうぞ。それでは、草薙さん、お・き・を・つ・けて。特に部屋の窓際とか……。ね」

恋歌さんは去り際に、そんなことを言いながら、ふつと笑っていた。

草薙さんに音符マークのつきそうな声援で送り出された僕らはとぼとぼと帰路についた。アパートの階段を、妙に機嫌の良い恋歌さんと並んで下りていく。

「ストーカーはいなかった。ならハッピーエンドですね」

「それで終わるとでも？」

待っていましたとばかりに恋歌さんが意地悪な笑みを浮かべた。

ほんとに、この人はこういう時が一番輝いている節がある。さらりと長い黒髪をかき上げながら、恋歌さんが自分のコメカミの辺りを指で差した。

「この伊達メガネ、実はただのメガネじゃないのよね」

「はい？」

「文字通りの意味。ただものではないものが、『見える』の」

つい、ジト目になる。

信じていいのか、疑っていいのか。あまりに胡散臭すぎる設定に半信半疑ながら、一応それが本物として話を進めることにした。

「人間……はいないですか？」

「少なくとも私たちのような『生身の人間』を、『人間』と定義するんならね」

それは言葉遊びなんだろう。

僕の目に、草薙さんの部屋には僕ら以外の知らない人は、誰も映らなかつたことには変わりはない。

「ちなみにこの郵便受けが荒らされてたのは事実。恐らく誰かの『イタズラ』と判断されるようなことしか起こっていなかったのも事実」

アパートの入り口に並ぶ郵便受け。

これが全部荒らされたというのはどうということだろう。ターゲットが草薙さん一人なら、それは可笑しな話だ。可能性としてはイタズラと、何か得体の知れないもの、が今回の事件に同時に存在しているとか……。

「まったく、有理君は理屈で考えたがる。それは傲慢だよ、人の心なんてその節々で変わるんだから」

恋歌さんのヒントは相変わらずヒントにならなかつた。

「これ、クロネコさんに貰った資料なんだけど、面白いことが書いてるよ」

渡された一枚のA4用紙に顔を近づける。

「成人男性の、交通事故死？　すぐそこの交差点ですね」

「そうそう、それが今回の事件の真相」

それが一体全体、何と関係があるというのか、僕は思考停止状態に陥って、ポカーンとアホのような顔をするしかなかった。

「私が見たのも多分その人の残り香みたいなのかな。……なんでも、生前に同棲していた彼女の家が現在の草薙さんの家らしいわよ」

「それはなんとというか、草薙さんも物騒な物件を押し付けられたもんですね」

「そう？　死んでも愛した人の元に戻るうとするなんて、立派なものよ。もっとも、辿り着くまでには色々郵便受けを漁ったりして調べたり、思い出したり、試行錯誤してみたいだけ」

「それが、今回のストーリーカー騒ぎの真相なんですか？」

「少なくとも、生きた人間のストーリーカーなんてのはいないでしょ？　いるのは害のない立派な恋する男の子が一人だけ。窓際がお気に

入りで、生前はよくそこで彼女と談笑していたらしいわよ」

いまいち、釈然としなかった。

けれど、恋歌さんが害がないというのだから、それは本当なのだろう。さすがに、草薙さんに何かがあれば、僕らの仕事の信用に関わる。

「妙な同棲生活ですね……」

その言葉にすると、少しだけ笑えてきた。

もっとも、人事だから笑えるだけで、僕個人としては絶対に願ひ下げだった。

二歌(9) (後書き)

日曜日中? と言いきれない微妙な時間に投下……。お待ちせしました。

二歌目、ネタばらし。残りは軽いエピソードで終了の予定です。話の都合上、最後の方は一気に公開したくなりますね！。

二歌（学食）

「あ、草薙さん。おはよう！」

「ひっ！ ごめん。じゃあね」

露骨に女の子に避けられるリアクションというのは、思いの外心に深い傷を刻み付けるものだ。

「えー、なにかした……かな」

つつい小さい小さく呟き、愚痴をもらしてしまふ。

時刻は早朝。午後からのテストに向けて、今日も今日とて学食の窓側の席で、勉強に興じていた。そんな僕に気づいた草薙さんのリアクションが、アレだった。

つい先日、土日の時間をつかってストーリーカーの心配を解決してあげはずなのに……。好感度はあがっても、なにか彼女に嫌われるようなことをした覚えはない。おかげさまで哲学のテストは乗り越えられたけれど……。

とはいうものの、中間テストはもう少し続く。今週さえ乗り切ればという最後の踏ん張りどころだった。もつとも、夏も本格的になつてくると今度は期末テストの心配をしないとイケないわけだけど。

ああ、宮城さんの家にとりたりしたGW辺りのことが懐かしい。

精神ダメージを一旦忘れ、再び勉強モードに入る。

「さて、さつさと中国語のお勉強に……」

「やつほー、有理君。勉強進んでる？」

「れ、恋歌さん!？」

学食に突然現れた意外な人物。

あきららかに、学生の集団に馴染まない雰囲気をもとった大人な女性、健全な男子生徒たちの視線を集めていた。夏っぽいキャミソールやひざ丈のジーンズは大学生っぽいラフさだったけれど、それだけでは恋歌さんのもつ大人っぽさは隠し切れなかったようだ。

「どどどどどど、どうしているんですか？」

「いや、なんか大変みたいだから、応援しにきたただけだよ」

シレッと言いながら、恋歌さんは当たり前のように、僕の横の席に腰掛ける。寂れた、油臭い学食に不釣り合いな光景だった。

「……疲れて昨日の夜から爆睡してたじゃないですか」

「いや、なんか目覚めがよくてねー。はっはっはっは」

草薙さんの事件の件で疲れが溜まっていた恋歌さんは、昨日は小学生みたいな時間に就寝して、僕が大学に出掛ける時も、布団を抱きしめて眠りこけていたのだった。

「もういいですよー。そういえば、さっき草薙さんに会いましたよ。露骨に避けられました……。ひどいと思いませんか？」

「はっはーん。にやにや」

恋歌さんはそんな僕の愚痴を聞くと、抑えきれないみたいにニヤニヤと頬を緩め始めた。

「まあ、そのね。彼女の身に何かあつてからだと遅いから、実は報告書の後ろのほうにこそつとね、注意書きというか蛇足の説明というか、例の同性カップルの片割れが交通事故で亡くなったって話を付け加えてて……」

「なるほど、気づいて、しまったと。窓際にご注意なんて、忠告までしてましたもんね」

「まあ一般的にいつて、害はないとはいえ、あんな場所さつさと引越すにかぎるでしょうね。ふっふ、愛し合うカップルの思い出の部屋に、他の女が居座るのも変な話だし」

死んだ後の人、幽霊のような存在の肩をもつ恋歌さん。

やつぱりこの人は根本的にロマンチストなようだ。

「でも幽霊つてたって、モノを少し動かしたりなんて物理干涉しかできないんですね。あのレベルだと……精々、アパート入り口の郵便受けに入ってた郵便物を、自室に持ち帰るぐらいしか」

「それでも十分にすごいだけだね。やはり習慣化していた行動というのは、物理現象化しやすいみたいね。おかげでお上の方に良い報告書が提出できそうだよ」

「にしたって、そんなの気のせいレベルですよ。よく気づきましたね、ストーリーがあるかもしれないなんて」

どうしても、その理由がわからない。

おそらく、草薙さんの身の回りで起こったのは、郵便物が移動していたとか、部屋の物が勝手に整理されていたとかその程度のはずで、そこからストーリーに結びつけるなんて、いささか自意識過剰だと思ってしまう。

「有理君はわかってないねー」

「なにがですか？」

こういう時の恋歌さんは大体僕をいじめてくる。

曰く、お姉さんとしてのサガがそうさせるだの、そんなナリをしている僕が悪いだとか、めちゃくちゃな理屈だ。

「女の子はそういう意味では、見えないもの、聞こえないものを感じてしまうことが多いとも言えるわね」

「それは要するに、霊感が強いということですか？」

「うーん、恋する乙女は、好きな人に心配してほしい……なんて。

恋する乙女はみな、悲劇のヒロインなのかもねー。ま、今回はドンピシャ、事前に手を打ててよかった、よかった。二つの意味で」

恋歌さんは意味深なことを言うと、一人で満足したように、さつと切り替え、ずいっとこちらに寄って僕のテキストを覗き込んできた。

「あー、中国語ね。昔ちよつと話したことあるわ、これぐらいなら教えてあげれるかな」

「是非、お願い申し上げます」

「いいけど、交換条件。また今度、私のお願いなんでも聞いてもらうから」

二カッと、気持ち良い笑顔をした、恋歌さんの個人レッスンが始まる。

その『お願い』とやらの重さというか、なんかとんでもないこと頼まれそうだなー、なんて危機感もあったけれど、どうせ僕は二つ

返事しかできない。それが好きな人からのお願いとあれば、尚更だ
った。

二歌（学食）（後書き）

ええ、これにて二歌目、終了でございます。

今回はオカルト（心霊）現象が主なようにみえて、結局は恋愛がらみだともいえるお話。

私は言葉を濁したがる典型的な日本人なため、抽象的な部分は察していただければ幸いです。

恋歌さんが妙にやる気だった理由とか、草薙さんが有理君に依頼した理由とか、とか……。まあ有理君はただの唐変木なわけですが（笑）

次回、三歌目はオカルト（超能力）編です。有理君やら恋歌さんの変な體質をちよろつと説明していけるかと思えます。多分、バトルもあるよ（笑）

では今回はこの辺りで、ではでは、また次回。

よろしければお気軽にご意見、ご感想いただければと思います。

コメントには（web拍手含め）返事させていただきます。

拍手の方、ありがとうございます。簡単なお礼掛け合いもございますので、未見の方はよろしければどうぞ。

みなさまの応援が一番の創作の活力なのでございます。

三歌（1）

異能力なんてとんでもない、ただの病気よ、びよーき。

というのが、恋歌さんの主張だった。

「……」

「そんな目で見るな、照れる」

20代後半ぐらいの、爽やかな男性が僕の視線に照れていた。

場所は街中、徐々に大学帰りに出勤する僕が、原付を止めて立ち寄ったコンビニで、適当なお菓子をチョイスし終えて店から出てきたその時。街道のベンチに座り込む男と目があつた。

ジト目になりながら、彼を見る。

それはその人がイケメンだったからとか、微妙にセンスのずれた珍妙な私服姿だったからとか、そういうわけじゃない。

「どうした、俺の方をそんなに見つめて……。嬉しいじゃないか」
キモい。

そこはかとなく、キモい。

肌蹴た柄シャツ。ダメージつき過ぎで露出の多くなった、ジーンズ。

色々と余分な属性がつきまくっている人だけど、見つけてしまったからには仕方がないと、嘆息する。

「あなた、人を殺したことがありますね？」

「……」

今度は男の人が黙る番だった。

「まさかとは思ったが、ばれるとはね。そういう君も、似たようなもんみたいじゃないか」

「それはそうかもしれませんが。けど、なんだか一緒にされるのは気に食わない気がします」

久しぶりの、濃度の高い異常者。そんな空気が彼にはある。僕や

恋歌さんと似た、一種の病人のような、違うような……。

雰囲気には似たようなものを感じてはいるが、根本的な部分は人それぞれ、事情も、現れ方も、違うというのが、オカルト現象の怖いところだ。

「何かお困りみたいですね？」

「あ、わかる。実は厄介ごとに巻き込まれててさー」

いたって深刻ではなさそうに、彼はへらへらと笑いながらそんなことを言う。

着ているシャツはしわくちやで、かえり血こそないが、うつすらとした硝煙の臭いや、裏路地のゴミ溜めみたいな臭いが香水の奥にひっそりと残っている。服装のセンスだけじゃなく、まっとうな感じではない、直感的な感想を抱く。

「ついて来て下さい。事と次第によっては力になれるかもしれない。ま、お金とりますけど」

「お、ほんとに……。いやーこの辺りにその手の仕事してる輩がいるってんで探してたんだよね。君らも同業？ だったらついでに紹介してくれない。なんでも凄腕の便利屋がいるとかって……」

残念。

きつとそれは、僕らのことです。恋歌さんのいうならば、オカルト現象専門の便利やではなく、ただの人間研究が趣味のモノ好き、ってところだけだ。

恋歌さんへの言い訳を考えながら、僕は男を事務所に案内するために原付を押し歩き出した。

三歌(2)

「有理君はもしかしたら凄腕の営業マンかもね。お金になるかはともかくとして」

嫌味というほどではなく、今回ばかりは褒められたようなニユアンスだったのは、偏に依頼主からお金の臭いを感じ取ることができたからだろう。

「いやー、なかなか古風な事務所っすね。その奥にこんな綺麗なお姉さんが鎮座してるとくりゃ、流行らないはずはないですよね」

「どうも、お褒めにあずかり光栄ですわ」

恋歌さんはしれっと流しながら、事務所の応接室的役割を果すソファを置かれた一角で、例の男と対面する。

そんな恋歌さんの隣で僕も一応男が変なことしやしないかと、見守っていたりした。

「で、さっそく本題なのだけど……」

「俺は工藤勇太。まあ殺し屋みたいなことをしていた」

突然の工藤の告白に、恋歌さんは顔色一つ変えずに話を続ける。

「ただの殺し屋ではないみたいだけど？ 持つてるのかしら、いわゆる『異能』と呼ばれるのを？」

こんなひよろりとした今時の若者の平均みたいな体型の人が殺し屋というのだから、それはただの殺し屋ではない。

銃器や格闘技や隠密行動で、敵を追い込むのが本物の仕事。僕らみたいな異質な人間は、相手を油断させるほど、世間と同じ殻をかぶれるほど、優秀な殺し屋として行動できる。

なにせ、相手の経験則や戦闘経験は役に立たず、思いもしない攻撃方法で、人を殺せるのが異能というものだから。

「まあ、それはおいおい、な。さすがにあんたらでも俺のトップシークレットは話せないぜ」

「確かにそうでしょうね」

恋歌さんはくすりと笑い、話を続ける。

「ここはなんの組織なんだ？ 超常現象研究所、と気持ち程度に立て札がされていた記憶はあるが」

「建前上は調査機関よ。いわゆる中立、私達の元締めもあなたのためところも多少のつながりはあるでしょうね」

「おうおう、そりゃあ話が早いこつて」

工藤は楽しそうに口元を緩めながら、膝を叩いて喜びを表現する。僕らはあくまで調査機関で、あくまで上に報告するのも調査だけで、結果得られる調査報酬と調査結果で運営されている、ただの便利屋。

なのに、今回は自称殺し屋の相手をしないとイケないのだから、難儀なものだ。

「まあ依頼つてのは簡単なことで、俺が元いた組織から匿ってほしってだけだ。大丈夫、結構汚いこともする組織だから、君らの良心は傷つかないだろうさ。ちなみに、報酬はそれなりに用意できると思う。殺し屋つてのは手取りがいいからな」

それはつまり、この優男も『汚いこと』をしてきたということだった。

けれど、それを許せてしまうような雰囲気が目の中の男にはあった。何故かはわからないが……。

「あ、タバコいいかな」

「どうぞ。有理君に怒られない程度になら」

「おっと、そいつは難しそうだ。残念だが、今はやめとくぜ」

工藤が笑いながら、こちらにウィンを飛ばしてくる。

最初に抱いた印象通り、こいつは油断ならない変な奴だ。それが表情に出っていたのか、僕は彼を睨みつけていたようだった。

三歌(3)

「さて、今回ばかりはさすがに社長に連絡つけないといけなから
ら」

恋歌さんは自称雇われ社員だった。僕はその社長さんを見たこと
はないが、形式上僕の上司にもあたる、この場所で一番偉い人。

といつても、なにやら世界中を飛び回ってるような忙しい人みた
いなので、僕たちの仕事に関わってくることは今までほとんどな
った。

「しかも、都合よく今、一時的に日本に滞在してるのよねー、これ
が」

工藤の依頼内容を聞き終え、束の間の小休憩。

お客さんである工藤は応接室のソファに残して、僕らは生活ス
ペーの方でまったりしていた。あんなチャライ男は適当に扱って
いて良いだろう。依頼人だけ。

「今回の依頼って相当やばいんですか？」

「……まあある意味最強の有理君がいるから、大丈夫っちゃ大丈夫
だけど。もしかすると荒事になるかもね」

それは勘弁願いたい。

「オカルト分野に精通した戦闘組織だもんねー。しかもそこから逃
げようだなんて、命がいくらあっても足りそうもないわ」

「異能力、ですか」

「そんなもの、戦闘利用して何になるっていうのかしら。ほんとに
クソ喰らえってところね」

超常現象的变化の、戦闘利用。そんなのは恋歌さんの、僕らの考
え方とは真逆の思想だった。超常現象なんてのは、ただの人間が、
ただの悩みで発現する病気のようなもので、それはごくごく普通の
誰にでも起こる事象なのだ。

決して僕らは特別ではない。

特別だと思つて、力を振るつてはいけない。

ましてや、人を殺すなんていうのは……。

否定はできない、生きるために強いられる人もいるし、異能なん
てハンデを背負わされれば、日常世界で生きて行くのは辛くなる。
誰もかれもが、僕や霞美さんのような恵まれた人間ではないのだ。

この先、工藤のように割り切つた利用されているだけの人間なら
まだいいが、エゴむき出しの人間に出会つた時、僕はどこまで耐え
れるだろうか。

「ダイジョブ、ダイジョブ。有理くんはそんなのじゃないから」

恋歌さんが優しく頭を撫でてくれる。

それだけで、沈んだ気持ちが軽くなる。

「いざつて時は守らせてもらいますよ、恋歌さん」

「頼りにしてるわよ。有理君！」

ぼんつと額に軽いデコピンを飛ばされた。

恋歌さんも単体で十分強いから、僕が守らなくても大丈夫だろう
けど。そこはまあ、男の意地というやつだ。吸血鬼特有の弱点も恋
歌さんには有ることだし……。

「あー暑い、暑い。毎日こう暑いとやる気も出ないわよね。太陽が
憎らしい」

窓から入り込む太陽の光に、目を細める自称吸血鬼。

苦手、ではあるらしい。日焼け止めも欠かせないらしい。

綺麗な色白の肌を守っていたくのは大いに結構だが、吸血鬼と
してそれでいいのかとは、たまに言いたくなる。

「危険がある分、たんまりと報酬はいただいちゃいましょう。それ
でエアコンやら扇風機新調するのもいいわね。ほら、あれほしい。

羽のない扇風機」

知的好奇心よりも、守銭奴としての顔が覗く恋歌さんの横顔はち
よっぴりいつもより悪そうだった。

三歌(4)

「うわ、カプチーノじゃねえか、これ。渋い趣味してんなー」

「くー、わかる、わかる！ いいわよねこの車！ 軽くて小さいのにすっごいのよー。しかも藍色が夜の闇に溶け込むさまといたら……」

恋歌さんと工藤がガレージ付近で盛り上がっていた。

社長に会いに行くため早速車での移動が必要だった。日が暮れ始めて、気温が下がってきたのはいいのだが、なんだか二人が勝手に盛り上がっているのが気に入らない。

「有理君は車に全然興味ないしさ……。カプチーノなんて、ただのコーヒーの飲み方だとしてか理解してないのよね」

「はっはっは、そりゃあいただけないな少年。ま、そんな無垢な所も魅力だが」

二人はなにやら、カプチーノがどうのこうのと騒いでいる。僕には意味がわからないが、馬鹿にされたことだけはわかった。

「あー、てかさー。恋歌さん？ カプチーノってことは二人乗りだよね、これ」

「そりゃそうだけど」

「それってさ、あそこの少年がはぶられるってこと？」

「あなたは一応依頼主ですから、私が送って行くつもりですが」

工藤がこちらをすまなさそうに見ている。

話をなんとなく理解してきた。要するに今我が社にある車は二人乗りなわけで、今から移動するのは三人。なら単純な引き算で誰か一人が別の手段で移動しなければならない。

「有理君。確か今日原付だったわよね」

「そう……ですけど」

わかつている。一応工藤は依頼主なわけで、しかも僕は今日原付でここまで来てしまった。

どうするべきかはわかりきっている。けれど、なんとなく気に食わない。きつとそれは、僕がこの工藤って男を警戒しているからだろう。

もちろん、独占欲や嫉妬とかもあるかもしれないけど。

「じゃあ、悪いけど、原付でお願いねー。私達先に行ってるから」「了解しました。おまかせください。これでも大学には原付で通ってるんです」

もつとも、その大学への通学は週1〜3という残念な数字を残していた。

「悪いな、少年。でも安心しろ、俺は……俺はな……」

恋歌さんに催促され、工藤が無理やり助手席に座らされた。

工藤は車のドアが閉まる間に僕に何か伝えようとしたみたいだけど、すべてを聞き取ることはできなかった。

「じゃ、有理君また後で！ だいたい、この車についてくればいいからー。一度だけ行ったことのある場所だから大丈夫だと思うけど、わかんなくなったら電話してねー」

一人残される僕は、原付のエンジンを、虚しい気持ちを振り払うようにキックで、スタートさせたのだった。

三歌(4)(後書き)

一応イメージとしてカプチーノという実在の車を持ってきてます。
唐突に思い出したせいで、将来的に乗ってみたくなるといふ畧。

三歌(5)

30分ほどで着いた、大通りの脇道。

ビルの地下駐車場へ下りて、原付を止める。ヘルメットを脱いで周りを確認すると、社長がいる一階へと続く階段の傍で、恋歌さんが妙に疲れた表情をしようなだれていた。

「恋歌さん。なんでそんなにげっそりした顔してるんですか」

「いやね、こいつが逃げ出した理由を詳しく聞いてただけど……」
基本的に（お金をおとしてくれる）依頼人には優しく、丁寧に接する恋歌さんにはあるまじき、こいつ呼ばわり。

工藤への態度があからさまに嫌悪感丸出しのものに変わっていた。否定はしたくはないの。ええ、でもなんていうか生理的に無理。

妙に生々しかったし」

「どういうことですか？」

話が見えず、睨むように工藤の方を向く。

「ああ、俺ホモなんだよ。ゲイでも可」

きつとこの時、僕はぽかーつとあほみたいに口を開けていたのだろっ。

「じゃ、じゃあ、そ、その、僕のこと魅力的だとか言ってたのって……」

「うん、そのままの意味だ」

そして、同時に身の危険を感じる。

冷や汗がフーッと首筋を伝い、反射的にぶるっと身体を揺らした。そんな人もいる、と頭ではわかっているけれど、いざこれほど大っぴらな人間に出会つと中インパクトがあるもんだ。

「有理君。気をつけて、ほんとに気をつけてね。特に背後とかお尻とかお尻とか」

「いや、それはさすがに……」

恋歌さんが半ば本気でそんなことを言うので、僕まで心配になっ

てくる。

「とつとと行かないのか？ いやすまん。俺も命を狙われてる身なんで」

お前が言うのか、という感じだったが、工藤の進言はもつともなことだったので、恋歌さんとアイコンタクトで慰めあい、社長のもとの向かうため階段を上り始める。

コンクリートがむき出しの無骨な雑居ビル。

足音が無機質な響きを鳴らし、一定のリズムで室内へと反響する。

「クロネコさんの次に、会いたくない相手ってところよね……」

「僕なんて、会うの3度目ぐらいなんですよ……」

恋歌さんですら、焦った表情をしている。

当然、付き合いの短い僕の方が、精神的な準備は足りていないわけ、足がすぐみそうになるのを必死で抑え、階段を上り続ける。

「社長に会うだけだったのに、随分大層なんだな」

唯一、状況が飲み込めない工藤だけは、脳天気な顔で、僕の背後を嬉しそうに歩いていた。

地下階段から上った先、徐々に社長が居るだろう部屋の、豪華な装飾がほどこされた場違いな扉が見えてくる。一階には他のテナントが入っておらず、パツと見た感じだと他の階の企業も訳ありな臭いが香ばしい。

「っと、確かにこりゃあビビるわな。大層お強い御仁がお待ちのようだ」

さすがというところか、自称殺し屋だった工藤も社長の威圧感に気づいたようだ。もっともあの人は、基本的に自分に敵しく身内に鬼畜で、他人（特にか弱い乙女とか）にめっぼう甘い、という感じだからして、工藤へのプレッシャーはたいしたものではないだろう。僕だって、特にとって食われるわけではないと思う。

まあ、まともに闘って勝てるはずもないけど。

「さて、それじゃあ……行くわよ！」

緊張しているのか、声を震わせながら、恋歌さんがドアの取っ手

を掴む。額に汗を浮かべ、緊張と、嬉しさの同居したような、なんとも言えない高揚した表情が、なんだか色っぽい。

社長は恋歌さんにとって、目標で憧れで恩人みたいな人なので、そうなるのも仕方がない。もつとも、相手が相手、憧れも強すぎれば、自身のコンプレックスを浮き彫りにされているのと同じだ。

「あら、こんにちわ。待ってたわよ。恋歌、それと……有理君」
開口一番、僕が名指しで出迎えられた。それだけで、危機感が加速する。

一階のほとんどを占拠する社長の事務所。奥の窓際に位置する一対のオフィス机と椅子、そして手前には余りきつたスペースに適当に置かれたドデカイソファ。窓際の椅子でくつろいでいた社長が、僕たちを迎えるように軽く手を振ってきた。

長すぎる髪の毛を無理やり結いつけたような綺麗な後ろ髪には、和風なかんざしまで刺さっている。それがまた似あってしまうのがこの人のコワイところだ。一見して年齢不詳、恋歌さんも美人だが、この人は美しいというよりも造形が完璧だった。一つ一つが洗練され、研磨されつくし、一切の無駄がないような感覚。

それがなんだか、気に食わない。
「今日わ急ぎですまないわね。仕事の説明と行きましようか。みんな、よろしくたのむわよ」

けれど、僕は恋歌さん以上に、この社長という人に逆らえるはずもなく、ただただいじめられるのだらう、ちよつと先の未来が容易に想像できてしまった。

三歌(6)

「こちら有理です。どうぞー」

「はい、大丈夫ですわよ。有理君」

耳に装着されたヘッドセット。ハンズフリーで会話ができるように装備されたものだ。本職の仕事の人が付けているような、本格的なものではない。携帯電話に繋いだだけの簡易的な通信手段。

場所は先程の地下駐車場、無造作に止められた大型車の影。折角上がったオフィスは早々に追い出されて、階段の下に逆戻りした形だ。

「なんといいですか、毎回ながら社長様の手腕にはびっくりさせられっぱなしです」

「それわそれわ、毎回ごめんなさいね。でも、これわ期待の裏返しなのだよ」

奇妙なイントネーションが、耳によく馴染む。なんだかんだで、この人は恋歌さんに似ている部分も多くあって、嫌いなタイプではない。

単に、出会うたびに、酷い目に会わされると、威圧感というか王者の貫禄みたいなのが強すぎるのが、小市民な僕には辛いだだけだ。「相手は殺し屋の組織。わたしの方から情報をリークすれば、あなたたちを追わせるなんていうのわ、朝飯前なのだよ」

「それを僕らみたいな素人だけで返り討ちにしようってんだから、恐れ入ります」

「まあいざって時わ、命ぐらいわ助けてあげるわよ」

もっとも恋歌さんだけでなく、社長が出張ってきている時点で、僕らに負けはない。こうやって社長がブレイン役をやっているのは、僕らの力を試しているだけなのだろう。

「恋歌さん、大丈夫ですか？」

「大丈夫もなにも、今回の私はフォロワー要員だからね、有理君こそ

大丈夫？ 久しぶりじゃないの、こんな実戦って」

一旦社長との通話をきり、恋歌さんへと繋ぐ。

「なんとか頑張ってみます。自信、ないですけど」

掌を開き、ゆっくりとぐーとぱーを繰り返す。

感覚は悪くない、だけど握力やら腕力はいつも通り、絶望的に足りてはいなかった。

「まあ工藤も頑張ってくれるみたいだし、最悪あいつになすりつければいいんじゃない？」

仮にも依頼主だというのに、ひどい扱いだった。

「おい、有理君。聞こえるか？」

「なんですか気持ち悪い」

そんな僕たちの会話に割り込む形で、工藤から通話が入った。仕方なく恋歌さんとの会話を中断して、工藤の相手をする。

「おいおい、いくら俺がゲイだからって、その反応は傷つくじゃないか」

「いえ、ゲイとか関係なく、工藤さんはそこはかとなく気持ち悪いですから」

第一印象からして、そんなのだから夕チが悪い。イケメンなのに、これほど人に嫌悪感を抱かせる容姿や雰囲気というのはどうなんだろう。

「わかってないねー。そうやって嫌がる相手を籠絡していくのが楽しいんじゃないか」

ほんとに、どうしようもない人だった。

「まあ冗談はこのぐらいにして、どうやら戦闘要員？ っぼいのは俺と君だけみたいだから、軽い打ち合わせを、と思ってるな」

「社長から必要最低限の説明しかされなかったですからね」

すぐに追手が来るから準備しろと、今の配置に付かされるまでに5分もかからなかった。まあ、社長の作戦だから、僕らが普段どおりに動けば成功は容易いのだろう。

「有理君はどうなの？ だいぶ強かったりするわけ？」

「戦闘力は成人男性より遙かに劣ります。能力、というのが使えれば……まあ大概のことはなんとかなる思いますよ」

「使えれば、つてことは不安定だったりするの？」

「普段は封印されている、と思ってください」

恋歌さんのおかげで僕は普段、一般人として生活できている。けれど、今回は荒事になりそうだからと、吸血タイムはなし。

もっとも吸血行動を封じられて、一番辛いのは恋歌さんのはずだけれど、……なんとなく寂しく思ってる僕は随分と調教されてしまっ
たらしい。

「さて、楽しい楽しいお話の時間はここまでみたいだな。ま、俺に
まかせろ。良い男の前では張り切らないわけにはいかないからな」

「気持ち悪いですが、戦力としては期待させていただきますね」

さて、と気分を切り替える。

駐車場に入ってくる車の音が、工藤の携帯越しに聞こえてきた。

ドキドキと高鳴る胸を抑え、気持ちを落ちつかせる。

というのが、リラックスする方法だと思ったのだけど……。

どうもそうはいかないらしい。

僕は、というより人間というのは、異能の力なんてのを振るうのが、楽しくて、嬉しくて、待ち遠しくて、しょうがないらしかった。

三歌(7)

敵が銃を持っているというのは、ある意味想定内だった。けれど、予想できていたからって対処できるわけじゃない。

「激しい銃撃戦っぱいのが始まってしまったんですが……」

「あらあら、頑張らないといけないわね」

なのに、社長は余裕綽々な風に高見の見物という感じだ。

車が地下駐車場に乗り入れてきてからの行動はさすがはプロ。車を盾に、入り口を塞ぎつつ、実行部隊が攻めてきた。

「有理くん。こつちも援護してくれよ。さすがにこの数はきつい」
黒塗りのワゴン車で現れた屈強な男が6人。銃を主体とした兵装、隊列での攻撃。

当然僕たちは防戦一方なわけで……。僕は囨役として入り口付近で戦っている工藤に近づくため、恋歌さんお気に入りの藍色スポーツカーを盾にするはめになっていた。

「つく、銃なんて生っちょろいもん使ってんじゃねえよ！」

工藤が叫ぶと、空中に赤い炎が輝き始める。高熱が帯のように広がって、銃弾を防ぎきっているようだ。

「ベタな能力なんですね、工藤さんのつて」

「うるさい、俺は熱い男なんだよ」

工藤はおちゃらけた雰囲気が消え、言葉使いも乱暴になっている。「有理くん、私の見たところ、敵は能力者が3人。残りが対能力者装備のプロつてところね。工藤みたいな能力頼みの奴らじゃなくて、全員ちゃんと訓練を積んだプロみたい。物量と火力で制圧するつもりだったんでしょね」

「思ったより、異能者は少ないみたいで」

「その方が、チームとしては優秀なんでしょ。所詮は異能なんてのは、異常だからこそその、副産物だから」

そういう相手の方がやっかいだった。

異能バトルなんて、馬鹿馬鹿しいものを始めるつもりはないけれど、所詮戦闘力皆無の僕は、正攻法で勝てるわけがない。必然的に奇襲やら能力の隙をつくなり、一方的に攻撃できるチャンスが必要だった。

「私は念のため一階事務所側に移動するね。別働隊がいるみたいでさ」

「れ、恋歌さん？ 気をつけてくださいよ……」

車の陰から一歩足を踏み出し、前へ出る。恋歌さんも心配だが、今は目の前の敵を倒しきるのが先決だ。

「あらあら、ごめんないね。別働隊がビル側に回ってるとは、わたしなりに誘導したつもりだったのだけど、十分じゃなかったみたい」

「いざつて時は頼みましたよ」

社長からの着信に、そんな言葉を返す。

少なくとも命だけは、命ぐらいは守ってほしいものだ。

「喋ってる暇も、ないか」

舌を噛む、ってほど素早い動きをするつもりはない。だけど、避けなければ銃弾の餌食になってしまう。出来ないことは出来ない、けれど、やらなければ死んでしまう。

そういう危機感が大切だ。そういう危機感が、僕の奥底の何かを覚醒させてくれる。銃弾が顔の傍を通って行くのが見えた。意識は結果へ、そして自分が行動するべき事だけを頭の中で一杯にさせる。避けなければならぬ、移動しなければならぬ、近づかなければならぬ。

相手は二人。工藤に一番近い位置にいる奴らだ。

「失礼、なんとか間に合ったようです」

工藤が炎で牽制していた、映画に出てくるアメリカの特殊部隊みたいな男たちから、物騒なごちゃごちゃした銃を奪ってやった。

突然現れた僕に面喰らっているのか、敵の反応が一瞬止まる。そこを見逃さないのは、さすが殺し屋ってところか。

「こいつら、俺のこと知ってるからって、炎の対策しやがって……」

「まあ俺は殺し屋だからさ。銃撃戦は得意じゃないけど、殺し合いは得意だぜ。蹴りや殴りも、能力の使い方次第で威力ぐらいいはアツプできるしな」

むこうだってプロだろうに……。所謂パイロキネシス能力があるといっても、相手を圧倒できるのは、工藤自身の戦闘能力も十分高いからだろう。

応用、転用、異能というのは奥が深い。使い手次第で、どんな形にも、どんな事にも利用出来る。

「さつて、後一人……。だな。つっても、こうなるのを待ってたんだろ、なあ！」

ついには後一人。通話越してはない、直接地下に響くほどに声を荒らげて工藤が叫んでいた。

相手が弱すぎる、とは僕も思っていた。社長の手回しがあつたとしても、これほどすんなり行くのには違和感があつた。

「工藤、よくうちの部下をこんなにもやってくれたな」

「手抜きしてたのはあんただろう？ それに、殺しちゃいねえよ」

「ふん、『あいつ』のことは殺したのになあ！」

最後に残った男は、装備していたヘルメットを脱ぎ捨て、白髪頭をさらけ出した。悲しみや怒りや感情がグチャ混ぜになったような奇妙な表情をした、中年の男。白髪頭ややつれた表情も相まって、随分老けたようにも見えるが、姿勢や雰囲気はまだまだ若々しく、戦士として現役だと教えてくれた。

「銃はいらん。どうせ、効かんしな。お前は直接俺の手で殺す………というのが、この気持を晴らす方法かもしれん」

「あなたの能力は、聞いたことなかったな。なんでも眠るように静かに人を殺すのが得意らしいが」

「お前なんぞを楽に殺してやるほど、お人好しではない」

銃を投げ捨て、ボクサーのような構えで、工藤に対する中年の男。工藤のようなひよろひよろの身体ではなく、ガツチリとした鍛えこまれた姿からは、強敵の雰囲気がある。

「始まった、わね」

「社長ですか……、これ知ってたんですか？」

「依頼人の抱える『問題』を解決する。恋歌風というのなら、研究調査する。っていうのがわたしたちの生業なのだわよ」

社長が電話越しに、くすりと笑う。

どうやらこの戦いの舞台は仕組まれたものらしかった。僕は彼らの再開をお膳立てしてしまっただけらしい。

「そんなことより、ドアの前の音を聞く限り、恋歌が苦戦してるみたいだわよ。フォーローに行ったほうが良いかもしれないわね」

「それを早く言ってください！」

車の陰から走りだす。タイミング良く、敵さんは銃を手放し、工藤と昔ながらのタイムマンっぽいのははっていた。

恋歌さんがいる一階事務所前の廊下へ向かいながら、二人の男を横目で見ると、工藤が炎も出さずに、苦しげな表情で蹴りを繰り返しているのが確認できた。

その姿はどこか、死に急いでいるようにも見えたのは……僕の気のせいだということに、しておいた。

三歌(7) (後書き)

戦闘シーン？ って描写が大変ですね。意味不明な言葉を書いていないか、心配ですw おかげさまでめずらしく一話が3千文字近くに……。
そろそろ三歌も終わりが近づいてまいりました。

三歌(8)

「あらあら、急がないと恋歌が大声では言えない、所謂成人同人漫画のような事になってしまいかもしれないわよ」

社長の、独特のイントネーションがこの時ばかりはうざったい。

地下駐車場から、ビルの一階へと続くコンクリートの階段を、息をきらせて上って行く。

「わたしわ思うのだけわ。男の子が一番力を発揮できるのわ、案外こういう状況なのでわないかとね」

足りない筋力や速度は、心臓を、身体の細胞を、全宇宙の時間を、すべて止めることで補っていく。いや、本当に止められたかなんて知る由もないけれど、僕ができるのは結果を導きだすまでの過程をすっ飛ばすだけなのだ。

何でもいいから、少しでも早く、恋歌さんの所に向かいたい。

もう一段上ろうと足を踏み出す。そして記憶が飛び、奇妙な感覚のまま、気づいた時には先程より一段上の段に足を降ろし終えた自分がいる。意識と結果のズレ。

目的を意識し、行動することによって得られるはずの結果。過程を飛ばし、そこにダイレクトに到達するような、奇妙な感覚だけを重ね続ける。

それはある意味、今やったような、階段を一段飛ばしで駆け上がるような方法なのだろう。

「時間を止めている。というのわ、いささか早計なのかもしれないのだけれど、そう現すのがわかりやすいのだからね」

「おかげで、僕は二十歳も間近になって、小学生並みの身体能力ですよ」

「噂に聞くとところによると、あそこもつるつるなんだったわよね？」

「うわああああああああああん。こんな時に、凹む情報を

喋り出さないくださいよ」

半ば、ヤケになりながら叫んでやった。いったい、どこのどんな噂を聞いたのか……とてつもなく不安になる。

大丈夫、最近は恋歌さんの吸血行為による、異能の一時的な封印のおかげで、成長というのが戻ってきた。

身長だって、徐々にだけど伸び始めている。ギリギリ150mしかない僕の身体も、きつと気づけば160くらいにはなるはずだ。だから、なにも焦ることはない。

階段を上りきり、事務所前の廊下を見渡す。

二人、黒スーツの男が倒れているのを確認して、その奥で恋歌さんが、銃を持った剃り込み頭の巨漢に、掴まれているのが……。

それを意識し、認識しきったとき、気づくと僕は、その男のことをぶん殴っていた。

もちろん、一発では足りない、僕程度の攻撃力じゃあ、一度や二度叩いただけでは足りないのだ。恋歌さんに教わった合気道や、太極拳の知識をフル動員しつつ、殴り、叩き、押す、という結果だけを残し、身体の急所とやらを執拗に狙い続けた。

やがて、男が倒れ伏すのを確認して、呼吸を再開。

新鮮な酸素が身体に循環し始め、徐々に感覚が元に戻って行くのを感じた。

「あれま、戦ってる相手が突然倒れるなんてオカルトってのは、中々奇妙なものね」

「だ、大丈夫ですか、れ、恋歌さん」

階段を全力疾走。その後能力を使って即戦闘開始。

ぜーはーぜーはー、と情けなく肩で息をするには十分すぎるほどの運動だった。

「有理君の方がとても大丈夫には見えないけど……。とりあえずありがとつ、おかげで怪我しなくてすんだわ」

銃で武装したそつち方面のプロに対して、1対3の戦闘をこなしてしまうのだから、僕がいなくても、きつと恋歌さんは怪我なんて

しなかったのだろう。

案外、僕が先程必死こいて倒した剃り込みの男は、恋歌さんが合気道的に相手の力を利用して綺麗に投げ捨てる、一歩手前だったのかも知れない。

けど、それでも真っ先に、恋歌さんのことは僕が助けたいというのは、男として当然の、ある意味どうしようもない欲求だった。

「ごくるさまだわ。……こいつらわただのヤクザかなんかだわね。金で雇われた……困？ 違うわね、邪魔されないようにアッチも手を打ってたつてところかしら。おかげで裏をかかれて地下以外の侵入経路からやられるとわ。してやられたのだわ」

ゆっくりと、事務所のドアが開き、社長が姿を現した。ぴっちりと着こなされた藍色のスーツ姿が眩しい。

社長は、廊下に転がる、怖い顔のお兄さんたちを物色し終わると、楽しそうに笑いながら、僕たちにアイコンタクトを飛ばす。あれは今から何か楽しいことがあるから、期待してなさいという顔だ。

「工藤の方も、終わったようだし、そろそろ依頼完遂といきたいのだわね」

和風に結わえられた髪の毛に、深々と突き刺さった一本のかんざし。先端に付けられた金色の装飾を揺らしながら、社長が優雅に歩き出す。

その姿を見て、僕はやっと事が終わったのだと安心するのだった。

三歌(9)

社長、恋歌さん。

この二人の趣味趣向というのは、似ている。要するに彼女たちがもつとも楽しいと思うこと。それは人の中身を丸裸にして、手助けしたり、きっかけを与えてやったり、分析してみたりする、正義のヒーロー？ みたいなことなのだ。

そのやり方や手口はあまり趣味の良いものとは言えそうもないけど。

「よっ、お疲れさん。皆無事だったみたいだな」

階段を降りたどり着いた地下駐車場の奥、『組織』とやらが置いて行ったワゴン車にもたれかかりながら、工藤がタバコをふかしていた。

「一番大変だったのはあなただったでしょうに。目的を達成できたかしら」

「あなたの差し金だろ……。まったく、ケツタイな舞台を揃えてくれたもんだ」

工藤が顎で指す先には、乗り込んできた組織の連中が簞巻きにされ、まとめられていた。けれど、僕の記憶が確かなら、一人足りない。

最後に僕が見た、工藤と一対一で戦っていた中年の男の姿がなかった。

「工藤さん。あの人は？」

「あいつか……。まったくあいつめ、空気中の酸素をいじれる能力だったか？ 俺の炎がまるで効かないでやんの」

「いやいや、戦いの結果は工藤さんが無事なのを見れば勝ったってわかるけど、そうじゃなくて」

「タイムンだったよ。男と男同士のな」

それだけ言うと、工藤は再びタバコに集中し始めた。先端の赤い

熱に心奪われたように、ゆっくりと確認しながら、そこだけを見つめ続ける。

「そう、ですか」

ここは素直に引き下がっておくことにした。

工藤の能力だ。もしかすると、灰になるまで相手を燃やすこともできるのかもしれない。それに、卑怯な方法を使えば、後日恋歌さんにも訊けば事の詳細はわかる。

でもまあ、こんな変態でおちゃらけた奴にも、知られたくないことぐらいは、あるのだろう。

「それじゃあさっさと行くのだね。せつかく追手を一時的に撃退したのだから、逃げるなら今、なのよ」

さあ行こう。僕たちは何も戦いたくて、戦ったわけではない。

困っている人がいたから、その人を助けるために、戦ったのだ。なら、ここで焦燥感に身を任せている暇はない。

「そっいえば、恋歌さんの姿が……」

駐車場出口付近のワゴン車から、振り向いて恋歌さんを探す。

「私の、私の車が……」

恋歌さんは愛車の変わり果てた姿に絶望し、涙目になりながらボンネットに頬ずりをしていた。そのボンネットには痛々しい無数の銃痕が残っている。

「うええええええん、私の、私の可愛いカプチーノが」

「れ、恋歌さん。きっと、治りますよ、これぐらい。たぶん、きっと、絶対」

思わず飛び出した変な日本語で、恋歌さんを慰める。言えない、言えやしない。交戦中、仕方なくこの車盾にしてみましたなんて、とてもとても。

にしても、子供のよう悲しみ、涙目になる恋歌さんは予想以上に、可愛かった。正直、恋歌さんには悪いが、もうしばらく眺めていたい欲望にかられる。

「ほらほら、その二人、さっさと行くのだね。恋歌もいつまでも

そんな軽自動車のことと悲しんでないで、わたしの愛車に乗るのかわよ」

「おいおい、今度はFCかよ……」

工藤はなにやら、ロータリーがどうのこうのと言いながら、助手席に乗り込んでいた。

駐車場の奥のほうにでもしまわれていたのか、完璧に無傷な白色の社長の車。恋歌さんの軽自動車と比べると、随分大きく、ずっしりとした安心感があった。

「恋歌もロータリーにしなさい。良い機会だし」

「なんで社長の車は無事なんですかぁー。どうしてですかぁ？」

伊達メガネを外し、とうとう泣き出しそうな恋歌さんに寄り添い、背中をさすりながら、社長の車へと向かう。

よほどシヨックだったのだろう。ごめんなさい、恋歌さん。

「さて、空港までフルスピードだわ。そこいらに転がってる侵入者の後始末わ安心して、すでに手回しておいたのだわ」

僕らが後部座席に座ると、早速社長はアクセルを踏み、急発進。

恋歌さんよりも乱暴そうな運転に、僕はシートベルトをしっかりと装着するのだった。

三歌(9)(後書き)

予想以上に長くなった今回の話。もうちょっとだけ続きます。
社長は思いつきで口調設定を加えましたが、良く味が出て、動かしやすいです。

では、何か御座いましたら、お気軽にweb拍手やらで私のやる気支援、または技術向上のためにフルボッコにやってください。読了ありがとうございました。

三歌(10)

一番近い国際空港に着く頃には、すっかりと日が傾いていた。これでも移動時間はかなり短縮されたほうだ。社長の運転技術と車の性能によって……。やっぱり普通自動車ってすごいんだな、なんて車に詳しくない僕ですら思ってしまった。

「それじゃあ、行ってくるぜ」

うつすらとだけ残る夕日をバックに、さわやかな笑顔でこちらを向く工藤は、ムカツクほどに様になっている。これがホモで変態だというのだから、もったいない話だ。

「元気で暮らしてくださいね」。色々大変だとは思いますが」

「ありがとうな。男と結婚できる国でやり直すつもりだから、よかったらいつでも俺の所に嫁ぎに来てくれ」

「やっぱり死んでください、お願いします」

最後まで、おちゃらけた人だった。

「恋歌さん。社長さん。お世話になりました。もうちょっとまお世話かけますが、宜しくお願いします」

「あらあら、わたしたちは恋する乙女の味方なのだよ。気にすることないわよ」

「私は……十二分にお金がもらえたので、問題ありません」

恋歌さんと社長にとって、『恋する乙女』の定義には大変開きがあるようだった。

「じゃあな、世話になった！ きちんと、決着もつけてさせてもらったし、安心して第二の人生が歩めそうだし……」

「工藤！ 精々足掻いて、もがいて、苦しみ続けるのだよ。生きていけば、どうにだってなるのだから」

そんな、社長の言葉に送り出されて、工藤が搭乗ゲートと歩き出した。キザったらしく、額に指をあてカッコをつけていたのを伸ばして、挨拶を返してくる。

最後まで一貫して、楽しいふざけた男を演じ続けてくれたのは、僕にとつてはとてもありがたかった。

「やっぱり、あれって演技なんですか？」

ゲートから離れながら、こつそりと恋歌さんに話しかけた。

「さあ、どうだかね。少なくとも工藤本人があの手性格だったことだけは確かだよ。人を殺した後まで、そうだったかどうかはわからないけど」

工藤と何やら因縁がありそうだった、男の言葉が脳裏をよぎる。

『あいつのことは殺したのにな』と……。仕事で殺しをやっていた工藤にとつては、人を殺すのは日常だ。咎められることはない。

ただ、もしも、私情で『殺し』をやってしまったのだとしたら……。

「さてさて、二人は喫茶店にでもよってゆっくりしていくのだから。なんなら近くのホテルに泊まってもいいわよ。お金はお姉さんに任せるのだから」

社長は豪快に笑いながら、お酒落ながま口財布から万札を三枚ほど取り出し、ヒラヒラさせ、こちらに押し付けてきた。言っちゃ悪いが、どこことなく、田舎のおばあちゃんを連想させる姿だった。

「お駄賃よ。わたしは忙しいから、もう行くのだから。工藤の後始末、クロネコさんをお願いしといてね。これ、資料」

嫌な名前があがった。

渡された資料はずっしりと重い。おそらく、ネットやらデータベースに残った工藤の痕跡の消去を、黒猫さんに依頼しに行くというお使いだろう。

それ以外にも、新しい国籍や身元の調達やら、工藤の資産の移動やら、色々あるだろうが、社長がすでに手を回しているのだろう。ほんとに、仕事の早い人だ。

「それと、あなたたちも、チマチマとやってるのだから。噂は聞いているわよ。異能というのも、大変なのだから」

まるで人事のように言いながら、社長は愛おしそうに、手のかか

る子供を見るように、こちらを向いて嘆息した。そういうあの人だつて、聞くところによると、『言霊』なんてのを使うプロらしいのに。

『力』に振り回されている側と、『力』を振り回している側の違いを見せつけられたようで、なんだか自分が情けない。しょせん僕の『異能』なんてのは、たしかに病気のようなものでしかないのだから。

「恋歌、有理君。二人とも達者だね」

お小遣いを渡され、ポツンと立ちすくむ僕たちを置いて社長がスタスタと去っていく。

「それと、有理君。手加減以外ができるように、リハビリといった方がいいのだわ。これからも、恋歌の隣にいるつもりなら、トラウマなんて消し飛ばしてしまいなさい。死なない程度に、死なないために」

そして、去り際に、耳元でそつとそんなことを言われてしまった。何もかもお見通し、ということらしい。

「有理君。どうしょっか？」

恋歌さんが万札をひらひらさせながら、困った表情でこちらを覗き込む。

「そつですね。ホテルも……悪くないと思いますよ？」

そんなことを言つてやった。

今日は本当に疲れた、今から事務所に帰るのだから大変だろうし、ホテルに泊まるのだからって選択の一つだ。あ、そういえば、僕の原付や恋歌さんの車も社長の事務所の地下に置きっぱなしだ。たぶん、手を回してはくれているだろうけど。恋歌さんの車……治るといいけど。

「ゆ、有理君？ ほ、ホテルに誘つて、え、ええ？」

隣で目をぱちくりさせている恋歌さんは、耳まで真っ赤になりながら、混乱しているようだ。

相変わらず、変なところでうぶな人だった。普段なら、これぐら

三歌(10)(後書き)

なんとか三歌(10)にて、終わりました。

エピローグの、三歌(喫茶店)にて、完全終了。次話の四歌に入ります。詳しいあとがきは土日にするとして、とりあえず、いただいたコメントへの返信を……。

07/24 16:50 こういうの大好き！

<私も大好きです！(笑) 好きな設定、好きなキャラで小説が書けるのはやはり楽しいですね。趣味丸出しですが、そんな趣味で、皆さんに楽しんでいただけるのが一番の喜びです。

今後とも、web拍手でコメントなどいただいた際には、返信していきたくと思っています。コメント、感想、文句、批評などはメールでもかまいません アドレスはブログへ(<http://mitukou.exblog.jp/>)

返信不要の場合、コメント引用に問題ある場合は、一言連絡いただければ対処いたします。

なんやかんや言ったりしますが、どうぞ皆様気軽に言葉をぶつけてやってください。必死に捕球しますのでw

それではまた次回、お会いしましょう。

三歌（喫茶店）

「恋歌さん、おいしいですね。ここの抹茶プリンアラモード」

「そうねー。おいしいですねー」

すっかり日も暮れた空港の喫茶店。

客はチラホラで、どちらかと言えば夕食を食べるために利用する人の姿が多い。寂れたアンティーク調の店内が心を落ち着かせてくれる。

磨きこまれた机の上に、どんつと置かれたアラモード。抹茶アイスの苦味とプリンの甘みが溶け込んだそれは、まるで宝石のようだった。通りかかった時に美味しそうだなとは思ったけど、まさかこれほどとは……。

「恋歌さん、機嫌悪いですか？」

「べつにー、少し忙しかったんで疲れてるだけよ」

あきらかに拗ねていた。仕事終わりの一杯にと、カップに口をつけ、恋歌さんがちびちびとカプチーノをすすっている。

「にしてもすごいかったわね、有理君。おかげで私、助かった」

恋歌さんはふと顔をあげると、ニヤニヤと意地悪な表情を浮かべた。

「なんだか、嫌な予感がする。」

「いえいえ、僕は何時でも恋歌さんのナイトでいたいんですから」

「ふーん、そういうえば工藤のことだけど……」

僕が反撃にと放ったキザったらしい台詞はスルーされ、社長から渡された分厚い資料で扇がれる。

「彼の経歴、知りたい？」

「知りたくないわけじゃないですけど」

本当のことを言えば、工藤が追われる原因というのが気になっていた。地下駐車場で、本気の表情で睨み合う男の戦いというのを見

た時から。

「工藤勇太、18の時バイクで大事故を起こすが、奇跡的に生還する。その時に異能力を発症。暗部の組織に発見され、以後その殺し屋としての日々を過ごす」

「僕らの上司連中……機関のいけ好かない国家公務員さんたちよりも前に、悪い人に捕まってしまったってことですか」

「そういうことね。燃え盛る事故現場から、やけど一つ無く生還するなんて、わっかかりやすい発症のしかたよね」

命の危機から生還する。

というのは、人間のどこかに欠陥を生じさせるには十分すぎる原因だ。生きるために、あるいは後遺症によって、人が本来持ちもしない力を具現化させる。

「僕らが見つけきれない人の中には、そうやって、暗部に引っこ抜かれる人もいるんですよ？」

「それはそうね、それも隠し切れない一つの真実。力を持つものはそれを自由に振るうことを望む。国やら機関に規制されるなんて、まっぴらなんでしょうね」

僕らの仕事は、そんな人たちを救う目的もある。

霞美さんのように早期発見、あわよくば治療が出来れば、過ぎた力や異常によって、道を踏み外すことはなくなるはずだ。

「で、色々あって、その組織を逃げ出したわけ」

「その色々がとてつもなく重要なんですけど」

僕が目を細め、見つめると、恋歌さんはニンマリと、アヒルみたいに唇を尖らせていた。

故意に僕の事をいじめているらしい。色々と溜まっていたんだろ。社長という格上のいじめっ子がいる状況では、僕も恋歌さんも、ただのいじめられっ子にしかすぎなかったから。

「そのものズバリ、恋よ恋」

「恋、ですか」

なんて、簡単に納得できるわけがない。

ジトリと睨み続けると、恋歌さんは満足したのか、話を続けた。

「うーん、有理君。現在世界における殺人事件の動機で、ポピュラーなものって何があるかしら？」

「金銭問題……とかですか？」

「それも正解。でも、今回は違う。その動機が恋愛絡みだっただけね」

恋愛で人を殺す。痴情のもつれというやつだ。

それは、頭では理解できるけど、抱いてはいけない感情のようにも思える。

「工藤と……彼の職場の上司が一人の人間を取り合った。結果、付き合っていた相手に浮気される形で上司に寝取られた工藤が、殺ってしまったわけね」

「あの時の人がそうですか」

「社長つては手が早いなんのつて、私もびっくりしたわ。まさか依頼人の『治療』まで行おうとするなんて」

おそらく、その恋敵を工藤は地下駐車場で殺したのだ。

愛した人と、それを奪った人を両方消して、彼は解放されたのだろうか……。それとも、自分の感情で、自分の意思で殺しをしたことを背負い続けて、無様に苦しみながら生きていくだけなのだろうか。

人の心を完璧に理解することはできない。僕の、理解したいという思いはただの強欲で、理由を求めることがナンセンスなんだろう。

殺すほどの愛。

殺されるほどの恋。

どちらも完璧に理解することはできない、人の心の異常性だった。「有理君は私のために殺してくれる？」

「……」

とてつもなく、意地悪な質問だった。

「わかりません。わかりませんが、殺しちゃいけないとは思ってます」

それでも僕は殺してしまうのだろう。

人間としての異常がある分、それが可能になってしまっているから。だから、だからこそ僕にとって、恋歌さんの存在はとてつもなくありがたい。彼女といれば、僕は普通の人間のようにすごすことができるのだから。

「さて、そろそろ帰りましょうか。もちろん、タクシーでね」

「ホテルはおあずけですか？」

「おあずけです。その代わりに、家に帰ったらたんまり吸わせてもらうから」

ぺろりと舌を出して、犬歯をのぞかせながら、恋歌さんは茶目っ気たっぷりの表情でこちらを向いた。

今回の功績に、吸血というご褒美が必要なのは、恋歌さんの方だったらしい。

「そういえば、工藤ってホモ？　なんですよね？」

喫茶店の会計を社長の万札ですませて、タクシー乗り場へと向かいながら、ふと思い出したことを呟いた。

「そうよ。だから、そうね、今回のあれやこれやは、男三人の三角関係のもつれてわけね。当然、彼らの取り合っていた『相手』というのも、むさっ苦しい筋肉隆々の男だったから」

「いやな、いやすぎるトライアングルですね」

恋の形は人それぞれ。

でも僕は、

「なに、私の顔になんかついてる？」

「いえなににも、早く事務所に帰りましょう。日付が変わる前に」

恋歌さんのように、美人な年上のお姉さんのために、殺すほうがまだ納得できそうだと、ウキウキと首筋の絆創膏の下にある噛み痕をうづかせながら、思うのだった。

三歌（喫茶店）（後書き）

そんなわけで、三歌目も終了。

いやー、なんとというか、長かった。ふと描写を増やそうと思うと、あれもこれも説明不足な気がして文章を増量してしまう今日この頃です。

この三歌目、で一区切り、起承転結でいうなら、起承まで終わったというところ です。

基本的には各話で独立して楽しめるような連載なんですが、色々と伏線回収しつつ、収束していけたらなと思ってます。

次は承へ転への変化、四歌目です。最終的には今までの三話とは少し違った話になる予定。

そういえば、空想科学祭に参加致します。

詳しくはブログ (<http://mitukou.exblog.jp/>) の記事にでもあげたいと思いますので (記事はこの小説投稿後に書き始めますが……) そちらもご覧いただければと思います。

それでは、宜しければ今後共付き合ってください。読了ありがとうございました。

四歌(1)

生者か死者か、人か人外か、そんなの些細な違いなのよ、きつとね。

「あのー、私つてやっぱり死んでるんですかね」

街を歩いていると、唐突にそんなことを尋ねられた。極々自然に、まるで人に道を尋ねるようなノリで。

なんとか期末試験を乗り越え、大学も夏休みに突入した8月の上旬。お盆は近いけど、まさかこんな質問をされるなんて。

「いやー、死んでないんじゃないですかねー。見えますし」

その問い掛けに、無責任かつ不透明な答え方をする。

20台前半の、誠実そうな長髪の女性。OL風のスーツとストッキングがよく似合う初々しい新入社員のような姿が見えていた。視覚で相手を認識できるというのが、生きているという定義に当てはまるならば、間違いなく彼女は生きている。

「はあー、でもあなたには見えるんですね。私の姿」

「それは、こうやって会話できてるわけですし」

イマイチ意図のわからない台詞だった。

最初は宗教か何かの勧誘かとも思ったが、彼女の初々しい、ホントに困ってますという表情を見るに、その手の輩ではないように思う。

「ちょっとびびっときて話しかけちゃって……。おかげでちょっと手がかりがつかめました！ありがとうございますね」

なんて、少し後ろが透けそうな存在感で、わざわざお辞儀までしてくれた。

「えっ……」

まぶたをこすり、思わず二度見する。

昨日は寝付きも良くて、明日は朝一番に恋歌さんのところに行っ

てイチヤイチャしてやろうと妄想しながら、気持ちよく眠りについた。

だから、体調はすこぶる良いはずで、目の錯覚とは考えられない。そう、確かに透けている。

去年の冬に恋歌さんに連れられ、テレビ番組よろしくな心霊現象に挑んだ記憶が蘇る。最近出会った、草薙さんの家にいたらしい、目視できないほどの空気のような概念ではなく、意思や表情を持った、より人間に近い幽霊という存在。

似ている、確かに似ている。

「ちよつと待つてください。なんだか、よくわからなくなってきました」

OJさんにお手上げのポーズでこちらの困惑を伝える。

さつきまで普通に会話していた人が、もしかすると幽霊か何かだなんて、信じられるほど僕は常識を逸脱してはない。そういうこともあると聞いて、そういうことも少しだけ経験しただけだ。

「もしかして、話しかけたのって、僕だけですか？」

「ええそうですね。皆さんあたしのお話を聞いてくれなくて、困ったところだったんです」

見ると、通行人たちは僕の方を怪訝な表情で見ている気がする。

まるで、独り言をつぶやき続ける痛い人を見るかのようだ。

「えーと、そうですね。ちよつと待つてください。多分、力になれますから。というか、一応仕事なんで、なんというか、ご協力お願いします」

と、支離滅裂な言葉で彼女に待ってもらいながら、助けを求めて僕は携帯電話のダイヤルをプッシュするのだった。

四歌（1）（後書き）

今後の展開等を考えて、ジャンルを恋愛 ファンタジーに変更しました。

一〇三歌は、ジャンル恋愛と言い張れないこともなかったのですが、今後の話しはさらにファンタジー色が強くなる予感です……。主題の一つが『恋』だったりもするのですが、とりあえず暫定ジャンルとしてファンタジーへ。

伝奇とか現代ファンタジーに近いのかもしれませんが。ライトノベル、娯楽小説という位置付けで考えていただければ間違いありません。が、結局は登場人物がイチヤイチャとくっちやべるだけの話でもあります。ジャンルの区分って難しいですね（笑）

四歌(2)

「有理君。まじめだね、私的には今日は夏休みだったんだけど……」
夏休みなんてものが、僕らの仕事にあったのには驚きだ。

寝起きの恋歌さんはとても機嫌が悪かった。

最近購入した最新式の羽なし扇風機で涼しみ動いてくれなかったのを、なんとか引つ張り、応接間で待つお客さんのところまで案内する。

僕の後ろでぶつぶつと文句を言う恋歌さんの姿に、若干後悔しつつも、ここまでできたからには後戻りできない。

「あのー、この方が困っていたみたいなんで……。連れてきました」
「あのー、よくわからないですけど、よろしくお願いします」

背中での切り揃えられた髪の毛をゆらしながら、一礼。やっぱり社会人なのだろうか、とても礼儀正しい。久々に正しい、社会人像というものを見た気がする。

「へー、これはまた、奇っ怪な……。いえ、失礼しました」

メガネケースから、『心霊』を観察する能力がある、疑惑の伊達メガネを取り出しかけると、恋歌さんは難しそうな顔で、お客さんを眺め始めた。

「失礼、お名前は？」

「はい、私は三津金商事の小早川明理こはやわあかりと申します」

「明理さんですか。私は恋歌と名乗っています。私たちのことは、そうですね……。便利屋とでも思っていただければ結構です」

ニコリと笑いかけながら、恋歌さんは商談モードに入ったようだ。「明理さん。率直に申し上げて、あなたはいま、いわゆる霊体と呼ばれるような状態になっています」

「それはつまり、幽霊みたいなものなんですよね？」

「そうですね、カテゴライズするならば、浮遊霊というところでしょうか。好き勝手に動き回れるわけですから」

幽霊かあ……と、明理さんをじーつと眺めてみる。

どこからどう見ても、ただの人と変わらないように見えてしまう。「私とその彼は、霊体という概念がごくたまに人間社会に混じっている。という事実を知っていたので、あなたのような存在をキャッチできたというわけです。これは相性や環境などにも依存しますが、あなたの姿を認識できる人間は基本的には『普通』ではないということになりますね」

いつの間にやら、僕も異常者の仲間入りというわけだ。

「えっと、それですね。つまりその……私って死んでるんですかね？」

僕と出会った時に投げかけていた質問を、明理さんが再び口にする。

「それを調べるのが私たちの仕事というわけですね。経験則から言わせていただけるならば、あなたは死んでいると確定したわけではありません。『死んだ』にしては、意識や行動がしっかりとしていますから」

どうやらそういうわけであるらしい。

霊体というのは、僕らの生活に色々な形で溶け込んでいる。それをカテゴライズしきるのは珍しく、時たま人間に害をもたらす奴らがいると、僕らみたいなのが葬除を行うのだ。

「あー、それで、ですね。お金ありますか？ お身体がこの世にないのでしたら、ご親族の方からでも結構なので、ご遺産や、自分だけしか知らないへそくりとかでもかまいませんよ」

恋歌さんは満面の笑顔でお金の話を始めていた。

多分この人はこの人で、出来る社会人なのかもしれない。礼儀とかルールとかそんなもん糞喰らえな人なんだろうけど……。

四歌(3)

「行方不明、というやつらしいわね」

クロネコさんからの電話を置き、恋歌さんが小さく息を吐き出す。客間で明里さんに待機してもらい、事務所から捜査を開始して早2時間ほど、普通の探偵や警察のような仕事は意外と簡単に済んでしまった。

「行方不明、ですか」

それなら少しは希望がある。

浮遊霊のようなものになってしまった、彼女の生死は未だわからずじまいではあるが、可能性がなくなってしまうよりは、十分マシな結果だといえるだろう。

「彼女の意識や、自我の度合いからいって、生きている可能性も否定できないわ。……もしくは」

「死んだことに気づいていないというやつですか？」

そうそう、と恋歌さんは頷き、パソコン越しにクロネコさんの送ってくれた捜査資料を指で差した。

「彼女、会社の資料によると今出張中らしいわね。ありがちな、旅行中の事故ってこともあるかも」

「事故……ですか」

よくある人が死ぬ理由。

交通事故、旅行先の山や川、人と人の殺し合いが表では行われなくなっても、人が死に至る理由なんてのはそこら中に転がっているのだ。

「浮遊霊つてのも、難儀なネーミングですね」

「霊体を等しく定義しろなんて難しい話だけどね。使いやすいから、昔の人のネーミングセンスを借りてるわけ」

ふらふらと行き先もなくさ迷うから浮遊霊。

それは生前の記憶から、同棲していた彼女の家に縛られているわ

けでもなく、通り続けた道を毎日往復し続けるわけでもない。なんのしがらみもないから浮いているのだ。

「そういう意味では、最近出会った草薙さんとのアレは地縛霊つてところですか」

「私としては、真実の愛をもった、いたいけな青年霊という説を押ししたいところだけどね」

とかく、恋歌さんはそういうものの味方をしたいらしい。

「で、だね有理君。私は今結構怒り心頭してるわけだよ」

声のトーンを落とし、恋歌さんが景気良い音を上げて、パソコンのキーを叩いた。

画面に現れたのは、とある会社のプロフィール。注意深く見るとどうやら明里さんの会社の関連企業のようなのだ。

「どうやらこの企業が、霊体やらに興味心身みたいでさ。商業利用？なんて馬鹿らしいこと考えてるみたいなのよ」

霊体を自由自在に取り出す。

なんてことが出来れば、世界が変わる。それを商売にしようものなら、金持ちの道楽が食いついてくるというのは十分に想像できる事だった。

「まったく人間の分際で死後の世界の真理に触れようだなんて、おこがましいにもほどがあるわよね」

絶対のタブーという程ではない。

人間は不可解なものがあれば、解を導き出したいと考える生き物だ。だから、過去未来、死後の世界を紐解きたいと願う探求者は現れ続けるのだろう。

「恋歌さんてきには、これも、わかりもしないものですか？」

「そりゃあそうよ。行けもしないところの情報なんてどうやって引き出すつてのよ。死後の世界から帰ってこれた奴がいるなら、とくに解は得られるはずなんだから」

死後の世界は、死んだ人が行く所。だから、死んでもいない浮世の人間が、その境地に辿り着くというのは不可能な話だった。

「しかも、その方法が人の魂こねくり回そうだなんて、許せるはずもない話よね」

「明里さんのためにも、僕らの出番ってわけですか」

客間で、僕が家から持ってきた据え置きゲーム機で遊んでもらっている明里さんを思い浮かべる。

すると、ぎゅっとまっすぐに唇を結び、肩をわなわなと震わせてパソコン画面の方を見ていた恋歌さんが、僕の方を振り返った。

「気になってたんだけど、小早川さんのこと、明里さん、だなんて呼ぶのね。珍しい……」

「いえ、えーっと、これには深い理由はないんですよ。なんとなくです、なんとなく」

急にこちらに飛び火する恋歌さんの怒りに戸惑いながら、言い訳の言葉を並べる。

依頼人たる明里さんのことは、普段なら、小早川さんと呼ぶべきところだ。というか、そうするつもりだったのだけど……。しばし考えああっと、勝手に納得する。

なんとなく、呼びやすかったのだ。

年上だし、

落ち着いたお姉さんみたいな人だし、

……どうやら僕は、お姉さん属性に目覚めきっている、らしかった。

四歌(3) (後書き)

次回更新は土曜日の予定です。

今週末には空想科学祭の方もあげたいなーと思う今日この頃。

・追記

次回更新は20日の予定です。お待たせしてしまい、申し訳ございません。

四歌（4）

「恋歌さん、お尻が痛いです」

「その台詞、なんだか誤解を招きそうで嫌だわ……」

お尻をさすり、とぼとぼと歩く。

場所は県境付近の片田舎。昼頃に事務所を飛び出し、鈍行電車に揺られること数時間、僕のお尻という高い代償を払い、なんとか目的の地に到着した。

いつもなら車で移動するのだが、生憎と恋歌さんの愛車は先日蜂の巣にされており、ただいま修理中。曰く、パワーアップして返ってくるまでしばらくお休みだ。

無人駅の改札をくぐり、うーうー唸りながら歩みを進める。

「いやー、自然が一杯ですな」

「夏っぱいわね。まあ今は仕事だけど」

駅前には閑散としており、僕ら以外の客は帰省目的っぽい若者が一人だけ。

居ても居なくても変わりなさそうなタクシーが一台だけ、ぽつんと止まっていた。

立ち止まりあたりを眺めると、ロータリーの少し奥の道路は、両脇を田んぼに囲まれているし、ポツポツとした住宅街の奥には、大妖怪でも潜んでいそうな巨大な山々が続いている。

「社長に聞いた通り……、靈験あらたかな土地のようね」

伊達メガネの奥に何を見ているのか、恋歌さんはメガネの縁を握りながら、そんなことを呟いた。

「しっかし、暑い暑い」

「軽装で来たんですけどね……」

半ズボンのものは、あまり好きじゃなかったけれど、暑さに負けて装備した和風ステテコから飛び出したスネに、涼しい風があったる。

「つく、有理君。女の私が嫉妬するほどのツルツルっぷりねえ」

「だから半袖とか、半ズボンっぽい長さは嫌なんですよ。子供っぽく見られそうで」

スネ毛に憧れるわけじゃないけど、体毛が薄いのはなんとなく、大人への成長を拒否されているようで、嫌だった。

恋歌さんの格好は、いつもより少し長い黒のスカートに、涼し気な白のブラウス、ポリシーなのか黒ネクタイと袖際のもふもふも忘れない。

いやいや、恋歌さんの生足だって、ツルツルじゃないですか、手入れしているんだろうけど。なんて、言えもしないことを、いつものニーソックスやストッキングから解放された生足を堪能しつつ思ってみたりする。

「さて、社長とクロネコさんの情報によると、問題の社屋はここを道なりに進んでいけばいいようね」

「もしかして……歩くん、ですか？」

「Yes!」

親指を伸ばし、グットサインを返されてしまった。

僕たちの目的とする、明里さんの手がかり。彼女の『結果的』な出張先となっている関連会社が、この片田舎にあるらしい。社内情報には、隠蔽が入っていたらしく、社長やクロネコさんの力がなければ、この情報に達するのは厳しかっただろう。

「タクシーという選択肢は？」

「有理君。田舎って車が通ったり近づいてくるとすぐにわかるものよ。静かだから」

「これ、徒歩30分ぐらいかかりますよね？」

「Yes!」

気に入ったのか、再びのグットサイン。

相手は靈的なモノに興味津々な怪しげな企業で、近づくのには注意を払いたいという気持ちや、一般人を巻き込みたくないというのもわかるのだが……。

「まあ、夏っぽいですね。田舎の散策なんて」
お尻をさすり、もってくれよ……、なんて呟きながら、僕たちは
目的地に向かい歩き始めた。

四歌（4）（後書き）

色々とズレ込み、久方ぶりの更新です。

お待たせしてしまい、申し訳ございません。

登場人物二人と同じく、田舎に帰省しておりました。

日曜日も更新の予定です。

空想科学祭用の話も公開しないと……ぐぬぬぬ。今週末、来週末あたりでぼちぼちと公開していきたいと思っております。

四歌(5)

「わちきに道を訊ねるとは……。旅行者かえ？」

「ええ、そうですけど」

目的地に向かい、歩いてきた道の途中。田んぼの脇のバス停で、ぼーっと座っていた女の子に話しかけた。

高校生ぐらいのＴシャツにホットパンツという軽装の女の子は、左右に結わえられた長めのツインテールを揺らしながら、ん？と小首をかしげる。

「ええつと、大体の場所はわかってるの、ほんとに、でも一応、確認というか、なんとというかね、ほら」

恋歌さんが女々しく言い訳をしていた。

スマートフォン地図の地図にべったりと目を寄せてはいるが、どうやらあまりにまわりが殺風景すぎて、道順が不安になってきたようだ。

「ほうほう、ここに行くのか？ そりやまた珍しい」

「珍しい？」

「ん、文字通りの意味じゃよ。その建物に『行こうなんて思うやつ』は珍しいからな」

地図を見せ、簡単な説明をしてみると、女の子は八重歯をのぞかせ笑いながら、ニヤリと笑った。

「旅行者さんやものねえ。ウチの土地じゃあ、そこに行こうなんてモンは誰もおらんよ」

「でも一応、大きな企業の関連会社で、再生紙やらの工場なんですよね？」

「そうらしいね。まあウチのモンで働いとるのはほとんどおらんで、皆さん外からこられたようやけど」

一呼吸ため、

「あんまりいい噂は聞かんね。やから、わきちらでそろそろどげんかせんといけんな思てるんやけど」

なまっただ独特の口調で、女の子は溜息まじりにそんなことを言う。どうやら近隣の住民さんとの関係はあまり良くないらしかった。こんな高校生ぐらいの子に、どげんかせんといけん、なんて言わせるのだから。

「どうも、ありがとございました」

「ん。そちらも、気をつけてな」

屋根付きのバス停で、何をしていたのか、少女は再びぐてーっと座り込み、何をするでもなく空を見上げ始めた。

「そちらの女の方。ずいぶん、良いメガネやの」

「ええ、結構な値打ち品なんですよ。便利ですし」

去り際にそんな言葉を投げかける、時代錯誤な喋り方をする少女。手を左右に振り、別れの挨拶で送り出される。

「風神様の、ご加護でもありゃあいいの」

最後にそう呟いているのが、微かに聞こえた。

ぶわっと風がふき、背中を押されるような感覚がほんの少し心強かった。

四歌(5) (後書き)

次回更新は、水曜日の予定です。

空想科学祭用の小説も来週あたりに、数回にわけて投下予定。ぐぬぬぬ、土日は、カードゲームとルービックキューブと執筆で終了してしまいました。

四歌(6)

「目標発見、これより潜入行動に入る」

「たしかにスパイモノっぽい状況ですけど……」

田舎道を直進し、辿り着いた先に待っていたのは巨大な建造物だった。

「見えるわ、見えるわ。魂の残響があっちこっちに」

伊達メガネ越しに、ぶるぶると震えながら、恋歌さんは興奮したようにあたりを見る。

田んぼに囲まれたのかな田舎町。その一角を占領し、防風林のように高く伸びた木々に隠れながら、鉄筋コンクリートの工場があった。

「風、強いですね」

「そうね、このあたりは昔からそうだったみたい。社長に聞いた時も、さつき道を聞いた時の子も、風神様がどうのこうの言っていたし、心霊的なモノが昔から寄りやすかったんでしょね」

だからこそ、利用された結果、明里さんのような浮遊霊を生む『何か』があそこで行われている可能性がある。

もくもくと煙をあげる煙突の下は怪しく、薄暗い。ワゴン車やトラック、高級そうな自家用車が止まった駐車場の近く、正面ゲートには、作業着の男が座り、じつとタバコをふかしていた。

「素人……ですよね」

「そうね、至って普通の一般人。奥にいるのも、暴力団関係の腕自慢が精々でしょうね」

以前出会った、殺し屋の組織とは比べるまでもない、ただの作業員に会社員。

潜入から戦うハメになったとしても、これなら僕らで対処できそうレベルだ。

「オカルト的な……仕掛けとかはどうなんですか？」

「簡易な結界、的なものはあるのかもね。こういうのは、門外不出で色んな術式やら儀式方法があるから、一概にはいえないところはあるけど。うーん、空気の感じだと、出来合い物を業者からもらって使ってるだけね」

人を寄りつかせないための、無意識下の意識修正。それぐらいの準備は、この手の施設に用意されていて当然だ、と聞いたことがある。そしてそれは、いくなれば、陰陽道の流れをくむ、言霊使いの社長の専門分野だった。

「恋歌さんは社長の弟子、なんですよね？」

「正しくは落ちこぼれの落第生つてところね。恋歌、なんて名前はもらえたけど、言霊使いとしては三流もいいところよ」

「結界とか、大丈夫なんですか？」

「心配無用。こんなのよほどの熟練者の仕業じゃないかぎり、経験則でオカルトへの抗体ができてしまった私たちにとっては、子供騙しみたいなもんよ」

事実、結界による人払いがあるだろう状況で、僕たちは無事にこの工場まで辿り着けている。『そういうもの』が存在すると知っているだけでも、僕らは一般人のように簡単に騙されたりはしないと、いうことなんだろう。

「さて、行きますか！」

「れ、恋歌さん？ 潜入ですよ、潜入？ 今にも殴りかかって行きそうな勢いに見えますけど……」

「うーん、有理君。やっぱり私、この人たちに腹がたってるみたい、一発殴らないと気がすみそうもないや」

オカルトの境界線を、なんの覚悟や代償もなく、土足で侵入してしまっただ一つの企業。

利益を得るために、人の命を弄ぶような行為。

「そうですね、……好きに、暴れてください。今回は僕も、能力なんて使うほどじゃなさそうですし、血を吸うならどうぞ、遠慮なく」
そんな彼らを許す理由は、どこにもなかった。

四歌（6）（後書き）

世間では8月も終わりかけ、夏休みの宿題を必死こいてやった記憶がよみがえります。

さて、色んな〆切りが迫ってきます。空想科学祭、土日あたりを目標に頑張って仕上げていききたいと思います。

次回更新は、土曜日の予定です。（更新は、別シリーズの作品の場合あり）

四歌（7）

「ちよいとそこのお兄さん、そこ、通してくれる？」

入り口でタバコを吹かす強面のお兄さんに近づくと、恋歌さんは満面の笑みで話しかけた。

「ああん、なんや姉ちゃん！ ココはあんたみたいなのが来るとこや……って、ひでぶっ！」

そして、珍妙な叫び声をあげて、宙を舞う成人男性。

「あ……あでえ……」

くるりと一回転し、背中をもらにうつたのか、コーホーコーホーと苦しげに息を漏らし続けるその姿は、中々滑稽だった。ありていに言えば、ザマアミロってところだ。

「さーて、今日はお姉さん、頑張っちゃうんだから」

工場の正面入口から正々堂々と侵入する。さっきまでの潜入がどうやら、という前振りには、どうやらゲームに影響された恋歌さんの戯言だったようだ。

「恋歌さん、気をつけてくださいよ」

「大丈夫、大丈夫、相手は素人みたいなもんみたいだしね、私らにとっちゃあ！」

慌てて駆けつけてくる工員たち。

思った通り、相手は素人みたいで、訳もわからず手伝わされているだけの作業員もいるかもしれない。実際、事の異常さを感じ取った社員の中には、腰を抜かして逃げ出した人もいた。

これで、警察なんかでも呼ばれたら、僕らは傷害罪で捕まったりするのかもしれない。

もつとも、そうはならない。

「おい、お前ら、取り押さえろ」

そうさせないように、キチンと彼らの上司は、対応しているはずだから。

稼動していないベルトコンベアーの奥から、スーツ姿の男がガタイの良い男を連れてやってくる。最近使われた形跡のない、食品加工用のオートメーション工場はフェイクで、本丸はこの奥にあるってことなんだろう。

「つてめえら！ おとなしくつかまれ！」

「あら、ごめんなさい。今日は私、機嫌が悪いんです」

さらりと拳を避け、恋歌さんが足をちよいつと男の足にかけ、掬い上げる。

それだけでバランスを崩した男は、宙に舞い、受け身を取れずに地面に叩きつけられた。合気道……僕もちよつと教わったが、恋歌さんレベルになると、あまり参考になりそうにない。

型とか、パターンとか、そういうものじゃない。手を添える、肩を押し付ける、足をはらう、そんな些細な行動だけで相手のバランスを崩してしまう。

とらえどころがないが故に、相手も対処に困るはずだ。

結果、恋歌さんはこの程度の相手なら、ちぎっては投げを、地で可能にしてしまう。

「てい！ 恋歌サーン、ホントに今回、僕暇なんですけど」

実は隣にいるチッコイ男の方が弱いんじゃないかと気づいた一人が、僕の方に迫ってくる。その攻撃をなんとか崩しながら、合気道の体捌きで人身投げをかましてやって。

「いいじゃない、たまには。お姉さんにも暴れさせなさい」

背中合わせに、恋歌さんと頷き合う。こんなストリートファイト紛いなことをしたいわけじゃないが、相手が思いつきりぶん投げるもいい相手だと、結構やる気もでるってもんだ。

「ちい！ 話が違っじゃないか！ いいから全員、アイツらを抑えろ！ こら、お前、逃げるな」

事情を知らない、純粹な一般人っぽい人たちだけでなく、ガタイの良い、戦闘要員として雇われたっぽい人たちまでもが逃げ出し始めた。

きつと、この仕事が、『何か』やばいということを知っているの
だろう。

「さーって、種明かし、生者と死者を冒読する、おたくの会社の商
品、是非私たちにも見せていただけませんかしら」

にっこりと、恋歌さんがスーツの男に笑いかける。

一方、管理職っぽいスーツ男は、青白い顔で、ひきつった笑いを
浮かべるだけ。

まったく、美人の恋歌さんが笑いかけてくれるってのに、その
リアクションはどうなんだ。僕ならきつと、喜ぶっていうのにさ。
まあ、いつも、無表情だからとかで、気づいてはくれないけど。

四歌（7）（後書き）

皆様、お久しぶりです。有恋歌、更新再開です。
次回更新予定は水曜日です。

ええ、ここ最近何をしていたかと、（言い訳）させていただきます
と、空想科学祭2011に参加してりました。

よろしければ、作者ページからそちらも拝読していただければと思
います。

と共に、どうやらある程度の投票、アンケート結果が必要なようで、
是非興味がございましたら、

企画サイト（<http://sffesta2011.tuzikaze.com/>）のつております、作品群を拝読してみてください。
面白い、驚かせる作品がたくさんありますので。

投票期間が終わるまでは、まだまだ祭りを盛り上げていきたいな
と思つ今日この頃なのです。

ではでは、今日はこのあたりで

四歌(8)

「そこを、『動くな』ってね」

恋歌が異質な声色で、男に命令を下す。その一瞬だけ、こちらまで伝わるほどに、言葉に重み加わっていた。

直立したままぶるぶると筋肉を揺らすだけで、身動きがとれないスーツの男を知り目に、問題の『何か』が眠っている工場の奥へと急ぐ。

「今の、言霊ですよね？」

「まあ、そんなものね。言葉に霊的な概念を乗せて飛ばす、私なんかのは、ちんけな小細工だけどね」

「見るの……というか、聞くの、久しぶりです」

「そりゃそうよ、こんなの普通に生きている分には役に立たないし……」

一呼吸置き、恋歌さんはあっけらかんとした口調で言葉が続ける。「私のは混戦状況だったり、相手が一般人でも精神力で跳ね飛ばされたり、第一、動きまわってる相手を止めるほどの拘束力はないもの。使えるのはさつきみたいにビビって威圧された相手を縛る、とかね」

「世の中、それほど万能なものはないってことですよね」

「チートみたいな異常があるくせに、その台詞、有理君がいうかな……」

拳を握り、こめかみのあたりをグリグリと小突かれた。

僕としては、こんな欠陥だらけの能力、万能なんて程遠いと思っ
ている。今だって、恋歌さんの吸血行為で封印されているわけだし、
身体の成長どころか、心臓とか臓器の動きすら止めてるような力に、
万能なんて言葉は似合わない。

「さて、これが問題起こしまくってくれた原因ってわけかしら」

しばらく歩くと、見せかけの流通ラインは終わり、きっかりと研

究施設の様相をなした空間が広がっていた。

「誰も、いませんね」

「大方逃げたんでしょ、こんな研究してたんじゃ、やましいことしかないはずだし。まあ、後で社長にでも手伝ってもらって、責任はとってもらいましょう」

施設には誰もいなかった。

あたりには、巨大なコンピュータや、精密機械の山、無造作に積み重ねた資料が、置かれている。よく見ると、慌てて逃げ去ったのか、投げ出された白衣や、床に転がるノートパソコンの姿が確認できた。

「で、まさかこれが」

「魂、つてところなのかしらね」

施設の中心地点にでかでかとそびえた巨大な機械。用途不明、冗談みたいな科学チックな管やパイプで繋がれ、外付けのパソコンへと何やらデータを吐き出している様子が見て取れる。

その機械群の中でも、極めて異質さを放っているのは、管やパイプが集約し、『何か』を輸送したのだろう終着点として存在する巨大な、フラスコのような入れ物だった。

楕円に近い透明な入れ物の中では、もやもやとした霧のような何かが、今も動きまわっている。

「信じれません。けど……、霊体っていうのは、実体がないのに、人間の形をなしてますから、イメージとしては近いかもしれませぬ」

「私だって、こんなもん、見の初めてよ……。まったく、どんな技術かは知らないけど、とんでもないもんを作ってくれたみたいね」
眼の前のそれが、魂とか霊体とか、そんなオカルトチックなものだとすぐには納得できなかった。普段、不条理な世界や環境、現状や問題に首を突っ込み廻ってはいても、これほどのものだと、さすがに開いた口が塞がらないってところか。

所詮、自分の知らないものには、驚き、脅えるしかなくて、僕ら

もまだまだ、この世には知らないことがあるちよつと踏み込んだだけの人間なのだと再認識する。

「れ、恋歌さん！　ここ……、管が繋がってる先に、人が……」
巨大な装置の奥に隠れるように、人が並んで眠るスペースがあった。

皆が一樣に、病院の患者が着るような簡素な白色の服で並んでいるその様子は、なんだか本当に人を実験道具としか見ていないように、物哀しいものがあつた。

「大丈夫、大丈夫ですか！」

検査用につながれた細い線を外しながら、なんだか彼らの頬や、肩を叩いてみたが、反応はない。そして、ざつと見る限り、ここに並ぶ五人の中に明里さんの姿はなかつた……。

「なるほど、この機械のせいっぽいわよね。魂は基本的に、本来の入れ物に戻る性質があるからして……」

ぶつぶつと何かを呟き、恋歌さんは顎に手をあて考えながら、うるうると歩きまわる。やがて、足取りは自然な感じで、メインモニターっぽい機械中央のコンピュータのところまで止まつた。

「れ、恋歌、さん？」

思えば、今日の恋歌さんは機嫌が悪い。

一年ぐらいの付き合いで、その上、いつも彼女に首ったけな僕が言うんだから、間違いない。だから、僕が悪い予感を感じてしまったのも仕方がないってもんだ。

「つまり、こうしるってことよね！　てい！」

見事な、かかと落とし。

体術の得意な、恋歌さんらしい強烈な一撃だった。

四歌(8) (後書き)

みなさんこんにちは、木曜日の朝にごめんなさい(汗

というわけで、更新です。次回は土日の週末の予定。

ノツてきたのか、最近筆が軽いです。そのせいか、描写が増えて行っている予感。

私自身、先が気になり、はやく先のストーリーに進んでほしい！
つてな人なので、ストーリーの進みはテンポよく行きたいなと思っ
てます。有恋歌も、ここからスピードアップしていきますよ、展
開的な意味で。

さて、宣伝です。

まずブログ「ものかきがり」<http://mitukou.exblog.jp/>

最近自分のブログ内で、私がおつ立てたゲームサークルスタッフ内
でのしりとり日記をやっています。ムチャぶりと下ネタ満載ですので、
よろしければ

次に、空想科学祭 <http://sffesta2011.tuzikaze.com/index.htm>

参加しました。私の参加作は、作者トップページからどうぞ。

現在投票期間中として、投票数が少ないとたいへん困るそうです。
よろしければ公式サイトから、数多ある素敵な参加作品を巡ってい
ただければと。

それでは、長くなりましたが、今日はこのあたりで

四歌(9)

もちろん、一撃で精密機械が完璧に壊れるわけもなく。

「こうなりや、僕だってやけになりますよ!」

僕まで加勢するハメになった。

「うりゃ!」

「僕は力ないんで、素直に、解体っばいものをしていきますけど…」

…

精密でシヨックを加えたら壊れそうな部分を狙い、恋歌さんの足や手を落ちる。機械相手にぶつかって、恋歌さんの身体の方が強いというのは、完全に人を超えている証拠だった。

まあ、恋歌さんの師匠は社長なんだから、それぐらいできて当然なのかもしれないと、こっそりと嘆息する。

「そろそろ、いいですかね?」

管やコードを無理やりひっぺがし終わると、僕は首をかしげ、半笑いで恋歌さんに向き直った。

「……やりすぎちゃったかな?」

「そうですね。なんか、変な煙出てますし」

機械というのは、本当に壊せば煙が出てくるものだったらしい。

内部でショートや発熱が起こっているのか、やがてあたりに焦げ臭いにおいが充満してきた。

「けど、本来の目的は果たせたようですね」

本来の目的、魂……と呼ばれるものだと思われる、白い靄を救出すること。巨大な透明な瓶のような球体の中で、靄が蠢きの速度をあげているのが見て取れた。

やがて、閉じ込めていた者たちの力に耐えられなかったのか、球体の一箇所が飛散し、大きな穴を開ける。戻るべき場所を探すように、靄たちが空へと広がっていった。

「これにて一件落着! だったらいいのだけどね」

恋歌さんのような技術があるはずもなく、振り下ろされた右の指先は変な方向に曲がって、傷つけられた肌は、今も地面に血を垂らし続けている。

「相手は完璧な悪霊。恨みの総量も相当なもの。あのレベルは経験、ないわね……。倒せる、かしらねえ……」

「れ、恋歌さん？」

不安げな声を、恋歌さんが漏らした。

腰をかがめて、戦闘態勢をとる。僕はそんな恋歌さんを見るだけで、何も出来ない。血を吸われて、発育の遅い、ただのチビに成り下がった僕では力になれないのが情けなかった。

でもまあ、いざって時は盾とか身代わりぐらいには成れるかもしれない。そう思い、目をこらし、悪魔憑き、となったスーツ男にじつと、視線を合わせた。

四歌(9) (後書き)

またもズレて土日明けの月曜日更新に……すいません。

今週土曜日までには、四歌、終了予定です。

基本的には一話だいたい10分割ほどの予定。計算しているわけではないので、まだわかりませんがw
今のところ、この四歌もそんな構成になりそうです。

よろしければ、感想なり、文句なり、励ましなり、web拍手等で遠慮なくぶち込んでやってください。
それではまた

・追記

リアルが忙しかったりして、また更新がズレ込みました……。すいません。

お待たせしてしまいましたが、9月24日には少なくとも更新を再開する予定です。

へと回り込む。『言霊』というのが効かない相手なら、僕らは普通に戦うしか道がない。

「おっと」と

僕の反対側で、相手の気を引こうと立ちまわっていた恋歌さんの方へ、スーツ男が向き直る。

「動きそのものはわかりやすいんだけど、問題は、私がノーミスでこれに対処できるかってことよね」

「ごげよちゃうとあたちゃおつあゝじゃおつあゝ！」

声にならない声を上げ、男は腕を振るう。すると、ひょいっと軸をズラすことでその攻撃を避けてみせた恋歌さんの横にある計測機械が、根こそぎ破壊されていく。

硬いボディも、金属のフレームも、『アレ』の前には意味をなさないようだ。

これはいよいよもって、僕のカミカゼアタックが迫ってきたらしい。ここは僕が食い止めるので先に行ってくださいなんて、一度は言ってみたかった台詞を使う機会があるなんて、思いもしなかった。なんて考えで、静かにあくまで無表情に、機会を伺う。

ぐっと、足の裏に力を込めて、突っ込む準備を整える。さすがにあんな化物だって、体そのものは人間。ボディにアタックしてそのままがみつけば、恋歌さんが逃げる隙ぐらい奪えるだろう。

恋歌さんが僕を気にせず逃げてくれるかどうかも、他に有効な手立てがないのかも、十分に考慮されていない青くさくて、自己中心的な作戦だった。

それでも、これが自分にできる精一杯だと、一撃必殺の捨て身攻撃を避けながら、痛みや消耗など見せない敵相手に奮闘する恋歌さんのことを思い、勢い良く足を蹴り上げたその時。

風、が吹いた。

四歌(10)(後書き)

久々の更新となつてしまいました……。

四歌もそろそろ終わりの予定。

明日も更新して、今週中には完結予定です。

予定が伸び伸びですいません(汗

空想科学祭の投票期間が切りが迫ってきたようです。よろしければ、
公式サイトの方(<http://sffesta2011.tuzikaze.com/>)で、投票への協力のほど、よろしくお願
い
します。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2935t/>

有恋歌

2011年9月27日09時43分発行